16 [illegible] 1954

鮪漁業

TUNA FISHING

MAY 1958
LIBRARY
FISH & WILDLIFE SERVICE

No. 16 (Jan. 1955)

新年号

— セイロン風景 —　セイロン調査団撮影

The Investigative Society of Tuna Fishery, Misaki

鮪漁業研究會

謹賀新年

祝三浦市制

大型漁船の御用命を待つ！

下田船渠株式会社設備概要

乾船渠 500 屯 一 1 基
引揚船架 500 屯 一 1 基
（最新算盤式完成）
同上 300 屯 一 3 基
其の他鋼木造船造修設備一式

第七東丸
AZUMAMARU No

下田船渠株式会社で修理中の大洋漁業所属まぐろ船第七東丸（310噸）

下田船渠株式会社

取締役社長 沢村久右衛門
常務取締役 沢村正三
静岡県下田港 電話伊豆下田 9・10・53
東京事務所 港區芝田村町4の13 電話芝（43）2539

営業品目
漁網•延繩•漁具•製造販賣
船具 • 機械電氣用品販賣
石油元賣

日本漁網船具株式会社

本社 東京丸ビル六階 電話和田倉(20)代表 1841
営業所 下関、函館、大阪、戸畑、長崎 工場 下関
出張所 名古屋、仙台、釧路、小樽 油槽所 川崎、女川、下関

目次

新年の辭　鮪漁業研究會長　菅野　進
同　農林大臣　河野一郎
同　神奈川県知事　内山岩太郎
鮪漁船紹介　第十二住吉丸　第二十六寶幸丸
鮪漁場圖（29年8月操業）

三崎、他四港の水揚調査を主体とする遠洋鮪漁業の考察（昭和29年6月）…… 1
　1　調査の概要 …… 1
　2　漁況の概要 …… 1
　3　各漁場の漁況 …… 1
月別、漁場別、鮪類漁獲調査表（昭和29年8月）別表 1 ……24
月別、漁場別、鮪類体長組成（昭和29年8月）別表 2 ……28
鮪類水揚價格表（三崎）昭和29年12月……22
鮪類標識放流について……23
米国における鋼線マグロ延縄試験報告……31
米国調査船チャールス•H•ギルバート号夏期航海より帰港……33
あめりか、につぽん鮪物語……（續）……34

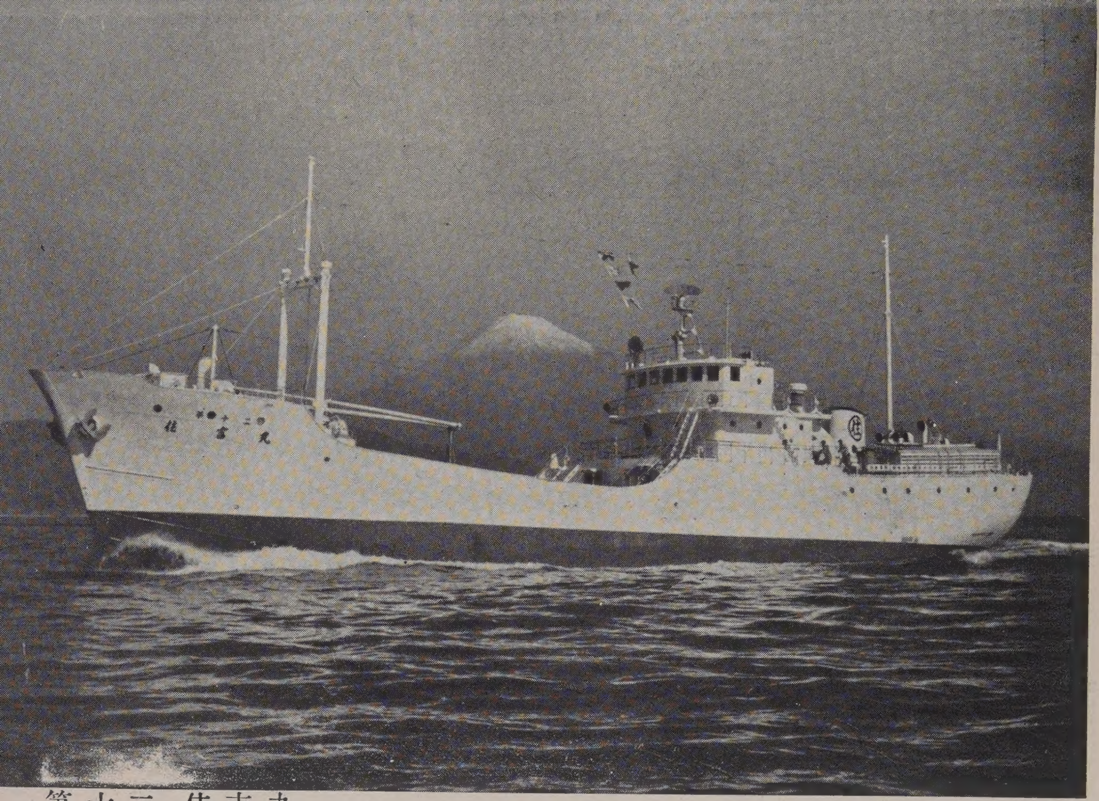
強くて•安くて•腐らない

鮪延縄に絶対経験と信用のあるメーカー

クレモナ
万　漁

國産製麻株式会社

本社　東京都中央區京橋三丁目四番地　電話東京（28）6605•6606番
工場　栃木県鹿沼市朝日町 電話（鹿沼）242•243番　同上野町 電話（鹿沼）377番



第十二 住吉丸

船　主　住吉漁業株式会社

造船所　株式会社　三保造船所

主要寸法	長 49.50m × 幅 8.50m × 深 4.30m	
總屯数		577.55 屯
魚艙容積		546m³
燃料油艙		240m³
速力	(最大)	12.48 節
主機	デーゼル 900 HP	一基
補機	デーゼル 180HP. 120HP. 25HP	各一基
無線	500W. 75W	各一基
冷凍装置	日新興業設計施工 アンモニヤ直膨式 7" 二基 8"一基	
レーダー. ジヤイロコンパス. 音響測深機. 方向探知機		各一機
竣工		昭和29年11月12日

漁船の冷凍装置に定評ある

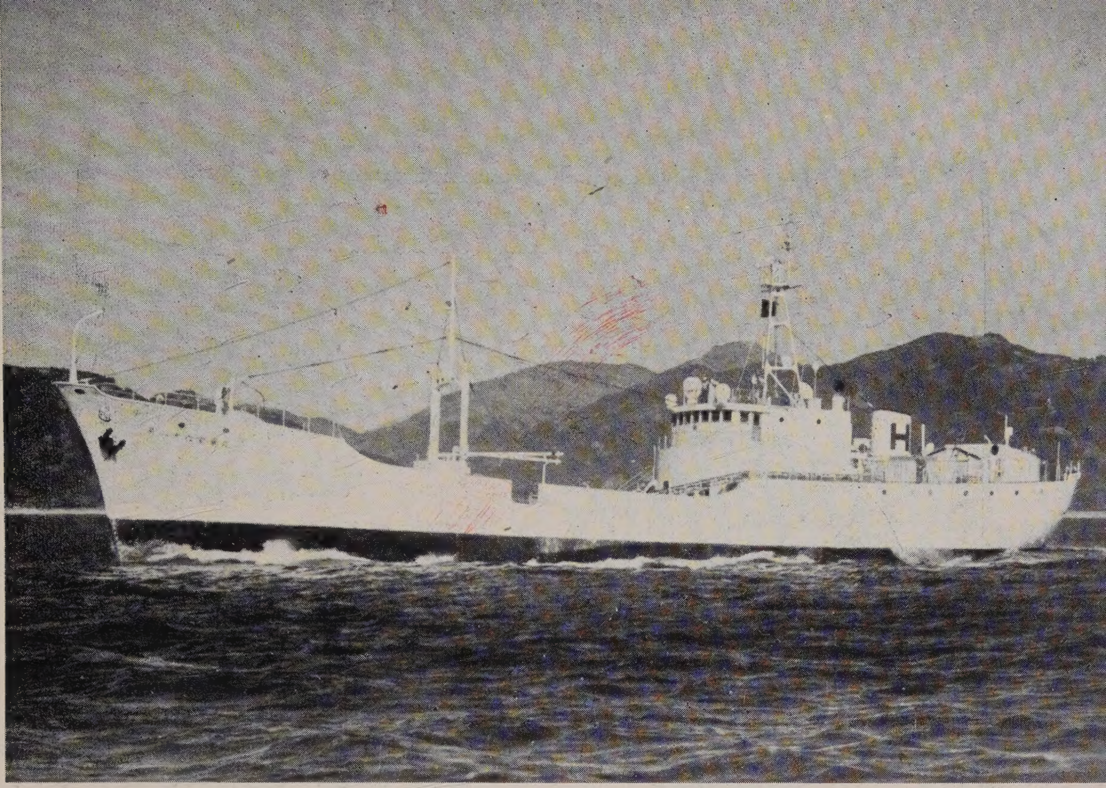
日新興業株式会社

本　社　大阪市北區中之島 3の3（朝日ビル）TEL. 北浜 (23) 1334. 2351
東京支店　東京都中央区銀座西6の3（朝日ビル）TEL. 銀座 (57) 4385. 6810
清水出張所　清水市三保本村西區　TEL. 清水 2203
三崎連絡所　神奈川縣三崎町西浜 46 海洋電機工作所　TEL. 三崎 443

施工船名

才12 住吉丸
光洋丸
富士浦丸
靜浦丸
才8 薩州丸
才3 熊榮丸

其の他百数拾隻



第二十六　寶幸丸

船　主	宝幸水産株式会社
造船所	日本鋼管・清水造船所

主要寸法	長49.30m×幅8.40m×深4.30m	
總屯數		554.59屯
魚艙容積		622m³
燃料油艙		262.86m³
速力	(最大)	12.56節
主機	デーゼル850HP	一基
補機	デーゼル125HP	二基
無線	250W．75W	各一基
冷凍裝置	高速八氣筒	二基
レーダー．魚群探知機．方向探知機		各一基
竣工		昭和29年12月19日

日本鋼管株式会社

本　社　東京都千代田區丸の内一丁目十番地一　電話丸の内（23）1491（代表）―8
3351（代表）―8
3571（代表）―9
4181（代表）―8

光電の方探

全方向自動直視式

7つの特許が生んだ

世界的製品

株式會社 光電製作所

東京都上大崎長者丸284の1

電話大崎(49)3265.5335.7438.7981

営業品目

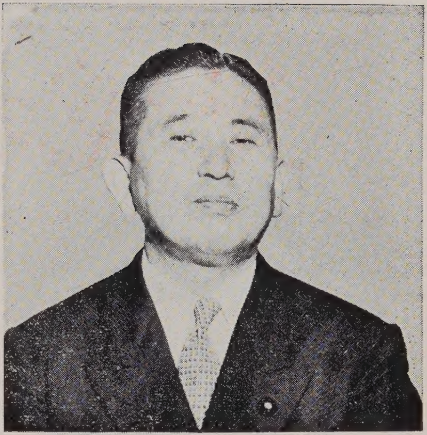
1 RCA 漁船用小型レーダー、ローラン、漁船用各種無線機
電氣音響機器及電気操縦装置の据付並に修理工事
2 陸上電信所及放送所の建設工事
3 特種電子機器及電氣装置の組立並にオーバーホール

三波工業株式会社

本社 横浜市西區北幸町一ノ三五
電話神奈川(4)0050,0575番
第一工場 横浜市神奈川區鶴屋町一ノ六六
第二工場 横浜市西區北幸町一ノ三五
出張所 大阪、神戸、門司
代理店 函館、呉、舞鶴

年頭に際し鮪漁業研究会に與う

農林大臣　河野一郎



会誌「鮪漁業」を覧て業者間に此の様な團体があり、立派な研究が行なわれ着々業績を擧げられている事を知つて誠にうれしく思う。

近時我が國鮪漁業は急速な發展を遂げ国内タン白資源の確保はもとより輸出産業としても重要な地位を占めるに至つたことは誠に慶賀にたえない。

水産資源の確保と之が調査研究は漁業界にとつて重要な問題であり政府としても重大な関心を持つているのであります。

今後共鮪漁業發展の爲め折角努力せられんことを希望致します。

年頭の詞

神奈川縣知事　内山岩太郎

昭和三十年の年頭に當り鮪漁業研究會誌上を通じて水産日本の第一線に活躍される皆さんに新年の挨拶を述べることは私の喜びとするところであります。

日本の鮪漁業者があらゆる困難を克服して戰後十年にして今日の盛況に至り今や太平洋から遠く印度洋にまで出漁してタン白源の補給に、又重要輸出品として外貨の獲得に活躍されていることは国民の一員として感謝にたえません。

これひとえに皆さんが海國日本の傳統をうけつぎ、加うるに鮪漁業研究会の如き研究団体を組織して積極的に調査研究を行い、その科學的な基礎に基いて仕事をされている賜と考えます。

鮪漁業界も昨年は水爆実験等、思わぬ被害を蒙り更に今後經營方面や資源問題等についても色々な問題があり多事多難なことと思いますが皆さんの旺盛なる意氣と卓抜せる漁撈技術、更に基礎的なる調査研究を併行することによつて之等の困難を突破し今後益々發展されんことを切に期待する次第であります。

新年の辭

鮪漁業研究会長　菅野　進

昭和三十年の新春を迎へまして、研究會会員各位に謹んで年頭の御挨拶を申上げます。

昨二十九年は鮪漁業にとつては誠に難しい年でありました。

漁業者は春早々に米国の行つた水爆実験のために優良なる漁場を衷失し、漁船の操業に著しい、困難を味はわされたのでありました。一方終戦後順調な發展を遂げた本漁業も轉機に立つたためか、海難事故は近年にない漁船數を計上致しました。

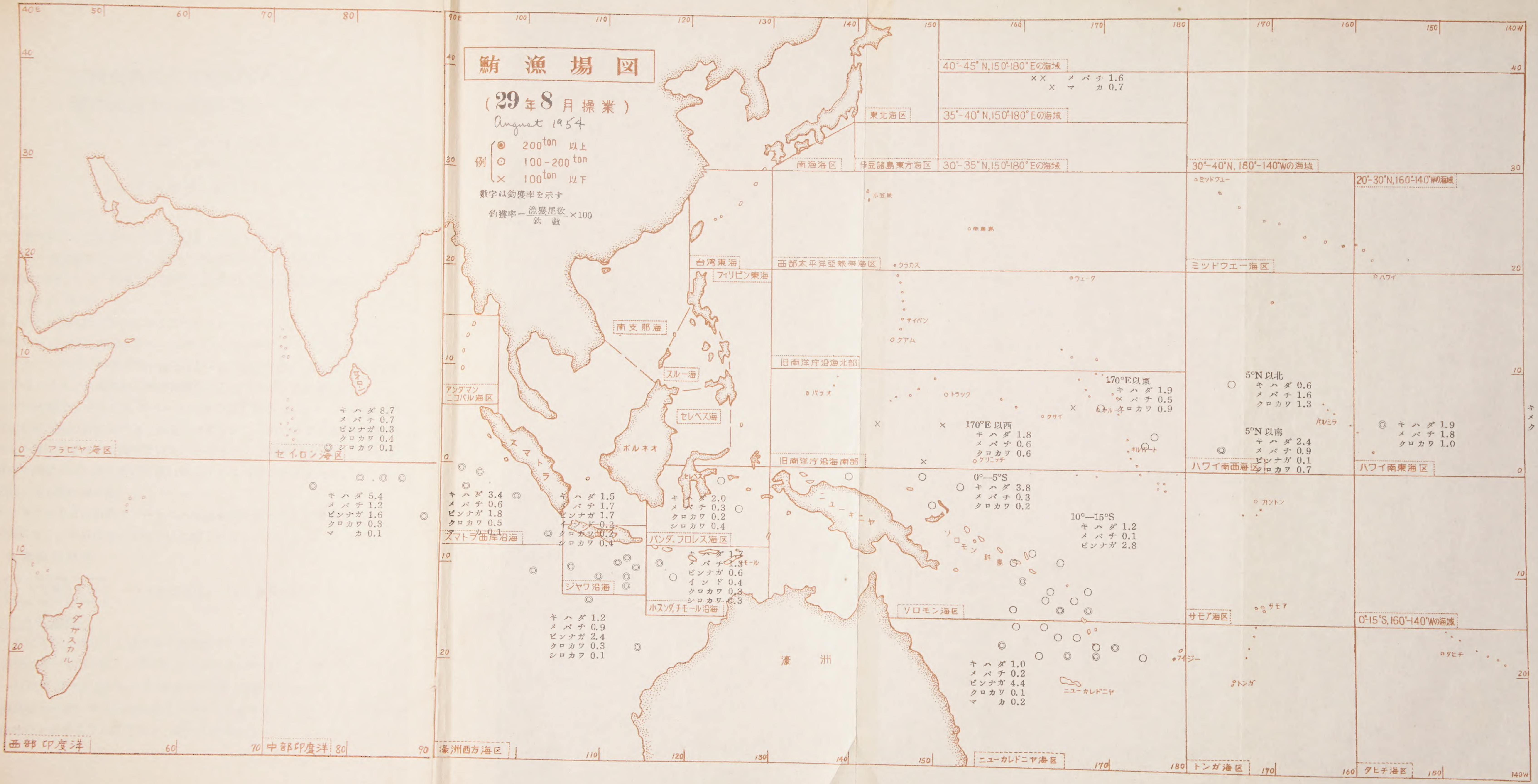
我々 漁業者は内外共に多難な一年であつたのであります。

本年も引続いてこの重荷を負ふている漁業者はこれが対策として漁場利用の方策と漁場の開發に全面的な究明も致さなければなりませんし、

海難事故の防止については綜合的檢討を加へ、その障害の癈除に努めなければなりませんのでこゝでぢつくりと腰を据えて、一、二年前のの全盛期の夢は棄て去つて鮪漁業の眞隨を究明して行くことこそ、今後本當に必要なことではないかと思つて居ります。

こうした立場から見ますと本來地味な研究会の仕事は本當に最も重要なところに來たことを痛感するのであります。

一同は銘記し、大いに努力して、その目的達成に勵んで行く決心で居りますので一層の御協力と御鞭撻を御願い致しまして年頭の御挨拶と致します。



鮪漁場図

（29年8月操業）

August 1954

例
- ◎ 200ton 以上
- ○ 100-200ton
- × 100ton 以下

數字は釣獲率を示す

$$釣獲率=\frac{漁獲尾数}{鈎數}\times100$$

40E
50
60
70
80
90
90E
100
110
120
130
140
150
160
170
180
170
160
150
140W
40
30
20
10
0
10
20
40°-45°N,150°-180°Eの海域
×× メバチ 1.6
× マカ 0.7
東北海区
35°-40°N,150°-180°Eの海域
南海海区
伊豆諸島東方海区
30°-35°N,150°-180°Eの海域
30°-40°N,180°-140°Wの海域
20°-30°N,160°-140°Wの海域
ミッドウエー
小笠原
南鳥島
台湾東海
フィリピン東海
西部太平洋亜熱帯海区
ウラカス
ミッドウエー海区
ハワイ
ウエーク
サイパン
グアム
南支那海
スルー海
セレベス海
ボルネオ
セレベス
旧南洋庁沿海北部
旧南洋庁沿海南部
パラオ
トラック
クサイ
ヤルート
ギルバート
グリニッチ
パルミラ
カントン
アンダマン
ニコバル海区
セイロン
アラビヤ海区
セイロン海区
スマトラ
スマトラ西岸沿海
ジヤワ沿海
バンダ.フロレス海区
小スンダ,チモール沿海
チモール
ニューギニヤ
ソロモン群島
ソロモン海区
濠洲
濠洲西方海区
ニューカレドニヤ
ニューカレドニヤ海区
フイジー
サモア
サモア海区
トンガ
トンガ海区
タヒチ
タヒチ海区
ハワイ南西海区
ハワイ南東海区
0°-15°S,160°-140°Wの海域
マダガスカル
西部印度洋
中部印度洋
キハダ 8.7
メバチ 0.7
ビンナガ 0.3
クロカワ 0.4
シロカワ 0.1
キハダ 5.4
メバチ 1.2
ビンナガ 1.6
クロカワ 0.3
マカ 0.1
キハダ 3.4
メバチ 0.6
ビンナガ 1.8
クロカワ 0.5
マカ 0.1
キハダ 1.5
メバチ 1.7
ビンナガ 1.7
インド 0.2
クロカワ 0.2
シロカワ 0.4
キハダ 2.0
メバチ 0.3
クロカワ 0.2
シロカワ 0.4
キハダ 1.7
メバチ 1.3
ビンナガ 0.6
インド 0.4
クロカワ 0.3
シロカワ 0.3
キハダ 1.2
メバチ 0.9
ビンナガ 2.4
クロカワ 0.3
シロカワ 0.1
170°E 以東
キハダ 1.9
メバチ 0.5
クロカワ 0.9
170°E 以西
キハダ 1.8
メバチ 0.6
クロカワ 0.6
0°—5°S
キハダ 3.8
メバチ 0.3
クロカワ 0.2
10°—15°S
キハダ 1.2
メバチ 0.1
ビンナガ 2.8
キハダ 1.0
メバチ 0.2
ビンナガ 4.4
クロカワ 0.1
マカ 0.2
5°N 以北
キハダ 0.6
メバチ 1.6
クロカワ 1.3
5°N 以南
キハダ 2.4
メバチ 0.9
ビンナガ 0.1
クロカワ 0.7
キハダ 1.9
メバチ 1.8
クロカワ 1.0
キハダ 2.5
メバチ 2.6
クロカワ 0.3

三崎他四港の水揚調査を主体とする遠洋鮪漁業の考察（昭和29年8月）

三　崎　　神奈川縣水産試驗場
野村、齋藤、下里、中込、上條、溝川
東京、焼津、清水、勝浦　　南海区水産研究所

1　調査の概要

8月操業分として調査せる鮪延縄船数は三崎38, 東京15, 焼津3, 清水2, 合計58隻でこの中体長測定を実施せる船数は21隻である。（勝浦未報告）

調査の対稱となつた漁場数は14で140°W以東の漁場が新に加つている。

2　漁況の概要

6,7月は調査船数は50,43隻で極めて少かつたが8月は58隻で稍増加している。特にソロモン群島南部からニューカレドニヤ海区にかけての漁場が増加しておりビンナガ、マカジキが多く又中部印度洋方面にも大型船が増加し始めている。この方面ではセイロン島南部から中部印度洋にかけてキハダが高率である。

ジヤワ沿海及び小スンダ, チモール沿海では7月に引続きメバチが多い模様である。

旧南洋庁沿海南部からハワイ南西海区にかけての漁場は6月以降操業船数は減少しており特にハワイ南西海區では8月からメバチが減少している。 西経140°以東の漁場で操業している1隻の成績は注目すべきものがありキハダ、メバチの率が比較的高く又大型の率が高い。

クロカワは7月に引續きマーシャル諸島東側からハワイ南西海區にかけての赤道反流域に多く、赤道以南の漁場では低率である。

3　各漁場の漁況

A　ハワイ南方方面　　ハワイ南西海区、ハワイ南東海區

ハワイ南西海区

8月は5°Nを境として南北各1隻調査されたにすぎない。

水温は6°—8°N, 173°—171°W の赤道反流域では28.2—28.7°c, 10°—11°N, 172°—171°W の北赤道流域では27.4—27.7°c で稍低い。

漁況はキハダは5°N以南に於ては6,7月は高率を示したが8月には稍低下し5°N以北のメバチも7月以降減少し始めている。

クロカワは6月以降5°N以北に於て高率を示し特に赤道反流域に高率である。

(キハダ)

5°N以北に於ては釣獲率0.57で7月の0.38より率が高くなつている。7月は北赤道流域では極めて低率で赤道反流域に於ては0.53の率となつていたが8月も10°—11°N, 172°—171°Wの北赤道流域では全くつれず6°—8°N, 174°—171°Wの赤道反流域では0.68で7月より更に高率となつている。28年度に於ても8,9月には最も率が高まつており今年も同じ傾向を示している様に思はれる。

5°N以南の1隻は5°N以北でも操業しているため釣獲率は2.43で7月の3.99に比べて低率となつている。然し28年度に於ても6,7月は高率で8月以降半減しており季節的な傾向を示しているかもしれない。

体長組成は5°N以北のもので中型が62%で最も多いが大型も32%で比較的多く6月以降大型が増加している模様である。

(メバチ)

5°N以北のメバチは7月を境として釣獲率が低下し始め且魚体も小さくなつている。即ち6月の釣獲率は2.63で大型30%を含む魚群であつたが7月には2.01に減少し8月は更に低下して1.55となつている。尚8月の5°N以北の1隻は北赤道流域では1.01の低率で赤道反流域に於ては1.66となつている。体長組成は111—130cmの小型が44.4%で最も多く中型以上は減少している。

ハワイ南西海區の10°N線のメバチは昭和27年28年共春から夏の間は率が高く且大型が多いが8月前後を境として大型は減少し小型が増加すると共に釣獲率も著しく低下し極めて規則的な季節變化を示している。

5°N以南の1隻は釣獲率0.91で7月の0.54に比べ率が高いが之は5°N以北でも操業しているためと思はれる。

(ビンナガ)

5°N以北では全くつれず5°N以南のみ7月と同率の0.12となつている。5°N以南では4月から6月の間率が高まり7月以降減少している。

(クロカワ)

クロカワは3月以降除々に増加しているが5°N以北に於ては5,6月は10°N線に多く7,8月は稍南下して赤道反流域に率が高い。即ち8月の5°N以北の1隻をみると北赤道流域では釣獲率0.48で稍低率であるが赤道反流域では1.48の高率となつている。又5°N以南の1隻も0.65で7月の0.35に比べて増加している。

体長組成は5°N以北のもので比較的型が大きく201cm以上の大型は33.9%に達

している。

ハワイ南東海區

1隻調査しているが5°Nを境としてみるとハワイ南西海區に於けると同様の傾向が現はれている。表に示すと次の通りである。

ハワイ南東海区　緯度別海況　(29.8)

区分	操業区域	水温 Water Temp.	操業回数 Station	鈎数 Hooks		きはだ YF	めばち BE	びんなが AL	くろかわ BM	
S. of 5°N以南	1—3°N 154—151°W	25.2—26.8	6	9,980	尾数	331	36	4	14	No. fish
					釣獲率	3.32	0.36	0.04	0.14	Catch rate
N. of 5°N以北	5—8°N 161—155°W	27.8—28.4	28	43,970	〃	676	907	0	521	
						1.54	2.06	0.0	1.18	

上表に示した様に 5° N 以南の赤道北側では7月と同様顕著な上昇流がある模様で水温は 25.5° c 前後が多く 5°—8° N の赤道反流域では水温は稍高く 28.0—28.4°c が多い。

(キ　ハ　ダ)

上表に示した様に5°N以南では3.32の高率を示しているが 5°N 以北では 1.54 の低率である。7月には0°—4°N の間で 160°—157°W では 4.83, 153°—150°W で7.65 の高率となつているが8月は全般に低下している。ハワイの P. O. F. I の1952年の調査でも150°W の赤道附近では8月はキハダの率は低下しており季節的な變化といへるかも知れない。

(メ　バ　チ)

メバチは 5°N 以南では0.36で極めて低率であるが赤道反流域では 2.06 で相當高い率となつている。ハワイ南西海區の赤道反流域の率は 1.66 で東よりに率が高くなつている。(後述する様に140°W以東の6°—8°N, 136—135°W 附近では更に高率の2.63となつている)

(ビ　ン　ナ　ガ)

ハワイ南西海区と同様5°N以北では全くつれず以南で 0.04の率となつている。この漁場ではビンナガは4月から除々に増加し6, 7月が釣獲率0.2前後で最も率が高く8月から低下している様である。

(ク　ロ　カ　ワ)

クロカワは5°N以南では 0.14 で極めて低率であるが赤道反流域では 1.18 の高率となつている。 然しハワイ南西海區の赤道反流域の釣獲率1.48に比べると稍率は低い。

B 140°W以東の漁場

千葉縣指導船房総丸の調査で恐らく日本漁船による 140°W 以東の鮪漁場調査は本船が始めと思はれる。

“鮪漁業” No. 13 のハワイ南西海區（メバチ）の項に說明した通りハワイ南西海区10°N線に出現するメバチの本據がこの漁場附近にあるのではないかといふ想定を考察するのに極めて重要な資料を提供している。

千葉県漁業指導船運營事務所の発表せる報告によれば中層水温及び流向流速は次表の通りである。

Water temps & currents E of 140°W 以東 流向及び中層水温（°c）（29.8）

月日 Date	位 置	流向 流速 Current	0	25	50	100	150	200m
8. 3	30°32′N 136°20′W		21.5	20.50	17.40	16.95	12.30	
16	7°08′ 135°39′	NE 0.8′	27.8	27.40	27.40	23.20	12.80	
17	7°14′ 135°46′	NE 0.5′	27.6		27.55	25.85	12.80	11.35
22	7°34′ 136°05′	NE 1.2′	27.4		27.40	25.70	15.10	11.40
9. 1	6°24′ 135°02′		27.4		26.90	26.20	11.00	13.00

上表でみれば 7°N, 135°W 附近の流向は何れも E 又は NE 方向で赤道反流系と考へられるが 100m 以深の水温は相當低い様で東経 160°—170°E 附近に於ける相模丸の資料と比較すると 100m 層約 2°c, 150m 層約 10°c, 200m 層約 6°c 程度低温である。恐らくカリフオルニヤ寒流の影響が相當强く現はれているものと推察される。尙同漁場の海況、氣象は水色 2—3, 透明度平均 28m, 波浪 1—3, 風向 S, SE 風力 2—4, 氣温 25°—26°c, となつている。

漁況はキハダ、メバチは略同率でクロカワは比較的少いが何れも大型の率が高い。

（キハダ）

キハダの釣獲率は 2.45 となつているが之は 1 回だけ 30°N, 136°W で操業した値も含まれ赤道反流系に於ける釣獲率は 2.55 となつている。

8 月の赤道反流域に於けるキハダの釣獲率を経度別にみると 174°—171°W 0.68, 161°—155°W 1.54, 136—135°W 2.55 で明瞭な東高西低の傾向が現はれている。

体長組成は大型魚が 59.3% で最も多く中型 37.6% で小型は 3.1% にすぎない。

この平均体重は約15貫、最大32貫に達するものもあり18貫以上のものが全体の24%を占めている。旧南洋庁沿海南部の平均体重9貫程度に比べると著しく魚体が大きい。（体重は内臓を除いたもの）

（メバチ）

メバチの釣獲率は2.63となつているが30°N, 136°Wで1回操業したときは僅かに8尾つれたのみで赤道反流域に於ける釣獲率は2.72となつている。

経度別に8月の釣獲率を比較すると174°—171°W 1.66, 161°—155°W 2.06, 136°—135°W 2.72でキハダの場合と同様に明瞭な東高西低の傾向が現はれている。

ハワイ南西海區の5°N以北のメバチ漁場に於て春から夏の間は大型が多く、その釣獲率も高いが8月前後に著しく釣獲率が低下するとともに大型魚が減少して小型魚が増加することは昭和27年以來の調査で極めて規則的に現はれている變化でありこの大型魚の分布は東高西低の傾向がみられ秋から冬季にかけて大型魚は東方に移動するものと想定していた。以上の想定が正しいとすれば今回調査された漁場はハワイ南西海区5°N以北のメバチ漁場と極めて密接なる関連があるものと思はれる。

体長組成はハワイ南西海区5°N以北が8月には大型は既に減少し始めて大型の率は21%にすぎず小型魚が最も増加して44.4%に達しているのに對し、この漁場では中型魚以上が多く、大型は3.75%に達しているが小型魚も尙21.7%含んでいる。

このメバチの平均体重は15.8貫で最大37.5貫に達するものがある。

秋から冬季にかけてハワイ南西海区5°N以北のメバチ漁場に増加する小型魚がこの漁場から移動するものとすれば冬季間はこの漁場では小型の率は更に低下するものと想像される。尙このメバチは産卵直後と思はれる旨が報告に附記されている。

（クロカワ）

クロカワの率は0.30で極めて低率である。クロカワはマーシャル諸島東側からハワイ南西海區附近が中心になる様に思はれ西經漁場の赤道反流域に於てはキハダ、メバチと逆に西高東低の傾向を示している。即ち174°—171°W 1.48, 161°—155°W 1.18, 136°—135°W 0.30で140°N以東は急激に減少している様に思はれる。

体長組成はキハダ、メバチと同様型が非常に大きく中心は191—220cmにあり201cm以上の大型は63%に達しており170cm以下は極めて少い。

C 旧南洋庁沿海南部

操業船数は3月以降減少し7月は3隻で最も少なかつたが8月は7隻で稍増加している。 特に130°—140°Eのパラオ諸島附近は6月にはキハダは極めて低率となり7,8月は全く調査されていない。

水温はカロリン諸島方面は稍高く29°c前後、マーシャル諸島東側水域で28.5°c前後となつている。

漁況は西カロリン諸島方面では5°N以南でキハダが稍増加しておりメバチは全般に少い。クロカワはカロリン諸島方面では5°N以北に稍多く、マーシャル諸島附近では赤道反流域に最も高率に出現している。經度別の漁況を示すと次表の通りである。

Southern Trust Terr.

旧南洋庁沿海南部 経度別漁況 (29.8)

区 分	操業区域	調査隻数 Boats	操業回数 Stations	鈎 数 Hooks		きはだ YF	めばち BE	くろかわ BM
140°—150°E	3°S—11°N 140°—152°E	2	35	48,500	尾 数 釣獲率	1110 2.29	192 0.40	192 0.40
150°—160°E	4°—6°N 150°—153°E	1	16	23,900	〃	365 1.53	199 0.83	119 0.50
160°—170°E	5°—8°N 167°—170°E	1	12	19,690	〃	150 0.76	125 0.63	236 1.20
170°—180°E	2°—7°N 171°—179°E	3	53	85,378	〃	1659 1.94	463 0.54	738 0.86

(キハダ)

カロリン諸島方面では28年は5,6月は相當高率となり7月以降低下しているが29年も4,5月に高率であつたが6月は全般に低率となり特にパラオ諸島附近は著しく低率となり7月から8月にかけて更に全般に低下している。

但し赤道附近では稍率は高く3°S—2°N, 148°—152°Eの1隻は釣獲率3.04となつている。

トラック島附近では7月は2.5であつたが8月は1.53に低下しヤルート島西側では0.76で最低率である。

マーシャル諸島東側では3隻操業し平均釣獲率は1.94となつているが緯度によつて釣獲率は著しく異り6°—7°N, 171°—173°E 0.86, 3°—6°N, 173°—179°E 1.78, 2°—4°N, 175°—177°E 3.31で3°, 177°E附近の率が相當高くなつている。

又3月以降のマーシャル諸島東側のキハダの釣獲率は3,4月は極めて低率で7,8月には率が高くなつている。

体長組成はマーシャル諸島東側の 6°—7°N, 171°—173°E の１隻の測定であるが大型の率が相當高く 43.9% を占め中型は 49% で最も多く小型は 7.1% にすぎない。

マーシャル諸島東側のキハダの体長組成は次表に示す様に３月以降次第に型が大きくなつている様である。

Southern Trust Terr. E. of - YF length freq.

舊南洋庁沿海南部　170°E 以東月別キハダ体長組成　(29.3—29.8)

month 月	Area 操業區域	Boats 測定船數	C/R 釣獲率		81—90	91—100	101—110	111—120	121—130	131—140	141—150	>151以上	Total 計	漁獲尾數
3	7—11°N 172—179°E	5	0.30	尾數	5	1	12	51	76	52	16	4	217	465
				%	2.3	0.5	5.5	23.5	35.0	24.0	7.4	1.8	100	
4	7—10°N 176—180°E	4	0.15				1	3	25	12	7	1	49	213
							2.0	6.1	51.0	24.5	14.3	2.0	100	
7	7—8°N 174—175°E	1	1.40				1	4	17	22	8	9	61	554
							1.6	6.6	27.9	36.1	13.1	14.8	100	
8	6—7°N 171—173°E	1	1.94					7	19	29	28	15	98	194
								7.1	19.4	29.6	28.6	15.3	100	

No. of fish caught

(メ　バ　チ)

７月には 7°—9°N, 152°—153°E では釣獲率 1.22 で稍率が高かつたが８月もその南側では 0.83 で稍多くなつている。従來の調査と同様カロリン諸島方面もマーシャル諸島方面も 5°N 以南では低率である。

体長組成は 170°E 以東のもので型は小さく中心は 121—140cm にあり中、小型魚が主で大型は 12.7% にすぎない。170°E 以東のメバチの体長組成は上述のキハダの場合と逆に４月に最も大きくなり７月から８月にかけて型が小さくなり、ハワイ南西海区 5°N 以北のメバチ漁場と大体似た傾向を示している。之を表に示すと次の様になる。

Same for BE

旧南洋庁沿海南部 170°E 以東　月別メバチ体長組成　(29.4—29.8)

月	操業區域	測定船数	釣獲率	尾数	100以下	101—110	111—120	121—130	131—140	141—150	151—160	161—170	171—180	181以上	計	漁獲尾數
4	7—10°N 176—180°E	4	1.66	%	13	25	21	55	62	95	106	47	30	3	457	2073
					2.8	5.5	4.6	12.0	13.6	20.8	23.2	10.3	6.6	0.7	100	
7	7—8°N 174—175°E	1	0.61	〃		8	11	19	45	65	24	4	2		178	243
						4.5	6.2	10.7	25.3	36.6	13.5	2.3	1.1		100	
8	6—7°N 171—173°E	1	0.54	〃			22	43	42	31	10	8	2		158	193
							13.9	27.2	26.6	19.6	6.3	5.1	1.3		100	

(ク　ロ　カ　ワ)

クロカワはカロリン諸島方面は 0.4—0.5 程度の比較的低率である。

マーシャル諸島附近の赤道反流域では比較的率が高く 5°—8°N, 167°—170° E 1.20、6°—7°N, 171°—173°E 1.76 で前述の西經漁場と併せて考へると東經165°—西経 155°W の間の赤道反流域にクロカワが多く特に東経170°—西経 175° の間が最も高い様である。

以上を綜合すると 3 月以降赤道以北に北上を開始して 5—6 月には最北端は小笠原諸島附近（西經漁場は本年は十分調べられなかつたが 27 年度の調査ではミッドウエー島南側部附近まで北上する模様である）まで北上したクロカワは 7 月から 8 月にかけて次第に南下し 8 月には上述せる様にマーシャル諸島附近から西経155° 附近までの赤道反流域に集中しその一部は既に 5°N 以南にまで南下しているものと思はれる。

尙体長組成は 170°E 以東の 1 隻の測定であるが中心は 171—190cm にあつて 4, 7 月の 161—180cm に比べ多少型が大きくなつている。然し大型魚の率は 7, 8 共約 20% で略同率で 4 月に比べると僅かに率が高い。

D ソロモン及びニューカレドニヤ海区

8 月はソロモン海区 14 隻、ニューカレドニヤ海區 11 隻、計 25 隻の調査を行つている。7 月のソロモン海区 4 隻、ニューカレドニヤ海区 9 隻に比べるとソロモン海区が相當増加している。

水溫は 1°—3°S, 152°—155°E で 28.6—29.9°c, 9°—10°S, 158°—159°E 28.0—28.5°c, 15°—17°c, 160°—166°E 25.5°—27.0°c, 22°—23°S, 170°—172°E 22.7°c で 7 月と大体同じ水溫である。

漁況はニューギニヤ、ソロモン群島北側附近ではキハダの率が高く、ソロモン群島南側部ではキハダは低率でビンナガが主となつているが 7 月に比べると更に南下している模様である。

ニューカレドニヤ海区ではキハダは低率でありビンナガの率が高いが 7 月に比べて 20°S 以南に多い模様である。尙 7 月に引續き南よりにマカジキが增加し始めている。

兩海区を通じた緯度別漁況は次表の通りである。（明瞭に區別し得ない資料は除いた）

Solomon, N. Caledonia, fishing condition by lat.

ソロモン、ニユーカレドニヤ海区　緯度別漁況　(29.8)

区　分	操業区域	調査隻數 Boats	操業回數 Stations	鈎　數 Hooks	尾數	きはだ YF	めばち BE	びんなが AL	くろかわ BM	しろかわ WM	まかじき SM
0°—5°S	0—5°S 136—155°E	5	74	132,132	釣獲率	5011 3.79	393 0.30	3 0.0	296 0.22	56 0.04	2 0.0
10°—15°S	10—17°S 156—169°E	6	114	202,000	〃	3541 1.75	370 0.18	8035 3.98	256 0.13	127 0.06	55 0.03
15°—20°S	15—20°S 158—176°E	6	106	194,515	〃	2006 1.03	261 0.13	6045 3.11	334 0.17	67 0.03	495 0.25
20°—25°S	21—23°S 171—176°E	1	43	79,578	〃	695 0.87	144 0.18	5688 7.15	46 0.06	25 0.03	138 0.17

（キ　ハ　ダ）

上表に示した様にキハダは0°—5°Sのニユーギニヤ北側水域のみ高率で10°S以南は全般に低率で南に下がる程率は低下している。

ニユーギニヤ北側は28年12月以降キハダの率は高く6月も4.56の高率であつたが8月は稍低下しているが尚相當高率を維持している。

10°—15°Sの間は3月以降キハダの率が低下しニユーカレドニヤ海區も4月以降低下している。

体長組成はソロモン海区では4隻の平均は中型が最も多く56.9%、大型29.5%で大型の率が相當高いがニユーギニヤ北側の0°—5°S, 136°—137°Eの1隻は中型70.9%、小型17%で大型は12%にすぎない。

又10°—15°Sの間の2隻は13°—14°S, 165°—166°Eの1隻は中型34%、大型67%であるが14°—16°S, 156°—158°Eの1隻は小型45.4%、中型53.4%大型は1.2%にすぎない。この傾向は7月のニユーカレドニヤ海区で16°—18°S, 153°—155°Eでは中、小型が主で大型は少く15°—18°S, 155°—167°Eの2隻は大型44%となつており、大体濠洲大陸よりに型は小さく155°E以東の沖合に大型が多い様である。

ニユーカレドニヤ海区8月の組成は中型33.3%、大型66.6%で大型が著しく多い。

（メ　バ　チ）

メバチは從來の調査と同様全般に極めて低率であるがニユーギニヤ北側では0.30で10°S以南に比べると稍多い。

体長組成は兩海區共121—140cmに中心があり中、小型魚が主で大型は比較的少い。

（ビ　ン　ナ　ガ）

ビンナガはニユーギニヤ北側では全く釣れず 10°—15°S では平均3.98で6,7月に比べて率は高くなつている。特に南よりに率は高く 10°—12°S では1.43にすぎないが12°—15°S では4.20の高率となつている。

ニユーカレドニヤ海区では 15°—20°S 3.11, 20°—22°S 7.15で20°S以南の率が特に高い。

7月の調査で165°—170°Eの間では15°—16°S及び21°—22°S の間は釣獲率7.0—7.5で高率であつたがその中間の 18°—19°Sは5.5で稍低率となつており8月も155°—176°Eの間では18°—20°Sの間は2.67で比較的率が低く15°—18°S の間が5.80, 20°—22°S 7.15で率が高く7,8月を通じて魚群が18°—20°S 線を境として南北に分れている様に思はれる。

ビンナガの体長組成はソロモン海区では従来と同様に 91—100cmが64%で中心となり81—90cm, 101—110cmが17%前後を占めている。

6月は型が大きく101—110cmが31%を占めていたがそれに比べると型は小さくなつている。

ニユーカレドニヤ海区もソロモン海区と同じ組成であり4,7月に比べて型が小さくなつている。

(クロカワ)

クロカワは7月と同様全般に低率であり特にニユーカレドニヤ海区の 20°S 以南は極めて低率である。

7月から8月にかけてクロカワは既に南下を開始している模様であるが赤道反流域に最も多く分布しており赤道以南は尙低率である。

体長組成は比較的型が大きく特に 0°—5°S の間は大型が42.8%に達しており10°—15°Sでは大型は稍少く141—180cmが多い。

(シロカワ)

シロカワは全般に少いがソロモン海區の10°—15°Sの間が稍多い。10°—15°Sの間は5,6月の間1時減少してニユーギニヤ北側が増加していたが8月には再び僅かに増加している。

(マカジキ)

ソロモン海区では極めて低率で12°S以北では殆どとれず 12°—15°S の間が釣獲率0.03となつている。ニユーカレドニヤ海区も18°S以北は極めて低率で 18°—20°Sの間が0.29で最も率が高く20°—22°Sでは0.17となつている。18°—20°Sの間で率が高いのは18°—20°S, 158°—160°E で操業した1隻が0.88の高率をあ

げているためで大体20°S附近にまで北上してきた模様である。

E バンダ，フロレス海區

2隻調査しているが1隻はセラム島附近からニューギニヤ北側にかけて操業し他の1隻はセレベス島東側で操業している。水温は全般に低い模様でセレベス島東側では26.4°—27.0°cとなつている。

漁況はキハダが主であるが極めて低率でありその他のメバチ、カジキ類も低率である。

(キハダ)

2隻の平均釣獲率は1.97で5,6月の2.3に比べて更に低下しているがセレベス島東側の1隻は2.44で大体5,6月と同率である。

8月は小スンダ列島南側の各漁場もキハダは低率でバンダ海を含めた東部印度洋全般がキハダは低調である。

(メバチ)

メバチも釣獲率0.33で低率である。特にセラム島側の1隻は0.12で極めて少いメバチは5,6月共0.7—0.8程度の率であつたか8月は特に低下している。

(クロカワ)

クロカワも平均釣獲率は0.16の低率で特にセレベス島東側では0.08の低率にすぎない。バンダ海では1月には0.87で稍率が高かつたが3月以降低下し4月から8月まで0.2前後の低率となつている。

(シロカワ)

シロカワも1月には1.06で最も率が高かつたが3月には0.50に低下し4月には最低率となつたが5,6月には稍増加し8月も平均0.35で稍多い。

F 東部印度洋方面

小スンダ，チモール沿海、ジヤワ沿海、濠洲西方、スマトラ西岸沿海

上記4漁場で総計12隻の調査を行つているが操業区域が2漁場以上にまたがつていて分離出來るものは各漁場に分けて記載した。

7月に比べて更に水温は低下して小スンダ列島南側水域一帯が25.2—26.7°c程度となつている。

漁況はスマトラ西岸沿海を除きキハダは6月以降低調であり、メバチはジヤワ島以東の水域では7月に引続き率が高い。ビンナガはジヤワ島以東では7月以降急

速に減少し始めている。又ジヤワ島以東に8月からインドマグロが出現し始めている。

カジキ類はクロカワは全般に低率でシロカワはジヤワ島以東に稍多い。

マカジキも大体7月と同率であるがジヤワ島以東にも出現し始めている。

小スンダ, チモール沿海

2隻調査しているが1隻は主としてロムボツク水道南側部で操業し水温は25.6—26.0°cで比較的低く、他の1隻はスンバ島西南側で操業し水温は26.0—26.3°cとなつている。

ロンボツク水道南側ではキハダが稍多く、ビンナガも稍多いがスンバ島西南側水域ではメバチが多くインドマグロも出現し始めている。

(キハダ)

キハダの釣獲率は1.69で6,7月に比べると稍増加している。之はロムボツク水道南側の1隻が2.31の率をあげているためでスンバ島西南側では0.80にすぎない。7月には12°S附近に明瞭な潮境がみられその北側ではキハダの率が高く、南側は低かつたが8月もロンボツク水道南側の1隻は9°—10°Sの間で操業しておりスンバ島西南側の1隻は11°—13°Sで操業し7月と同じ傾向を示している様に思はれる。

体長組成はロムボツク水道南側のもので中型魚が主で小型も稍多く大型は少い。7月も12°S線の潮境の北側では大型は少く中、小型魚が主であつたが8月も同じ系統の組成と思はれる。

(メバチ)

メバチの釣獲率は1.29で7月以降メバチの率は増加している。特にスンバ島西南側の1隻は1.89の高率となつている。又ロンボツク水道南側の1隻は0.86で稍低率である。

体長組成は7月は小型以下が多く中、大型は極めて少かつたが8月は著しく型が大きくなり中型魚が66.4%で最も多く、小型は少く大型が14.7%となつている。ジヤワ沿海でも8月はメバチの型は大きくなつており季節的な變化と思はれる。

(ビンナガ)

ビンナガは5,6月には釣獲率5.1前後の高率を示していたが7月には2.4に半減し8月は0.70で更に減少している。8月の2隻の中、スンバ島西南側の1隻は0.04の低率でロンボツク水道南側の1隻は1.03となつており、ロンボツク水道を境として東側はビンナガは殆と消滅している。

この体長組成は中心が91—110cmにあり111—120cmも18.7%含まれ相當型の大きいビンナガである。5月の測定では中心は91—100cmにあり101cm以上の大型は36.5%であつたが8月は101cm以上が58.1%に達している。

（インドマグロ）

6,7月に殆ど消滅したインドマグロは8月に入つて再び出現し始めている。之は明かに濠洲大陸の西岸に沿つて北東上する流れに乗つて北上してくる模様で8月の2隻の中、スンバ島西南側の1隻は釣獲率0.86となつているがロンボック水道南側の1隻は0.02の低率にすぎない。

28年に於ても小スンダ，チモール沿海では8月に多くなり9月には最高率を示し12月以降減少している。ジャワ沿海との関係は出現の時期はジャワ沿海の方が約1ヶ月位遅れ消滅する時期は小スンダ，チモール沿海より3—4ヶ月遅れており結局濠洲の西岸沿いに北東上したインドマグロは8月頃スンバ島附近に出現しその後1—2ヶ月後にはジャワ島南部に移動し春には再び南下する様に思はれる。

（クロカワ）

クロカワの釣獲率は0.25で7月の0.17に比べて稍増加しているがロンボック水道南側の1隻は0.08の低率でスンバ島西南側の1隻が0.49で稍率が高くなつている。

体長組成は7月に比べて型が大きく大型魚も50%に達している。

（シロカワ）

シロカワは5月には釣獲率0.62で最も率が高かつたが6月以降次第に減少している。8月は0.25で7月より稍多いが之はロンボック水道南側の1隻が0.44の率で稍多くなつているためでスンバ島西南側の1隻は0.08にすぎない。但し前者のシロカワは極めて型の小さいものの様である。

（マカジキ）

マカジキは7月に出現の兆候がみえたが8月に入つて明かに増加の傾向を示し釣獲率もジャワ沿海と略同率の0.07となつている。　但しスンバ島西南側の1隻は0.02の低率でロンボック水道南側の1隻は0.16となつている。之でみるとアンダマンニコバル方面からスマトラ島沖合に南下したマカジキは6月にはジャワ島南部に達し8月に入つてロンボック水道附近に達している模様である。

ジャワ沿海

8月は6（+1）隻調査している。水温は小スンダ，チモール沿海に比べ多少高く26.0—26.5°cが多いが10°—11°S, 109°—110°E附近では25.2°—25.8°cの低水

温もみられる。流向は10°—13°S, 108°—115°E の範囲ではE, NE方向の流とW, NW, SW方向の流れがみられ6, 7月に引続き12°S附近に沿つて東西方向の潮目が形成されている模様である。

漁況はメバチは7月に引続き率が高いがキハダは低率でビンナガも7月以降減少している。インドマグロが多少出現しているが之は南よりでつれている模様であり、カジキ類はクロカワは尚低率でシロカワ、マカジキは7月と同率である。

(キハダ)

キハダの釣獲率は1.54で7月に比べ稍低下している。6,7月は12°S附近の潮目の北側では2.5前後の釣獲率であつたが8月は同じ部分で更に率は低下している

体長組成は7月には12°Sの潮目の北側に小型魚を主とする魚群が出現していたが8月は再び型が大きくなり大型が最も多く49.6%を占め中、小型魚は比較的少い。

(メバチ)

メバチの釣獲率は1.66で7月の1.60に比べ稍増加している。然し船によつて釣獲率は著しい差があり最高4.28, 最低0.42となつている。

体長組成は7月は型が小さかつたが8月は小型魚は減少して中、大型魚が増加し大型の率は35.7%に達している。

(ビンナガ)

ビンナガは6月に最高の釣獲率4.49を示したが7月以降減少し7月2.44, 8月1.74となつている。

ビンナガも船によつて釣獲率はかなり異り最高2.9—最低0.3で12°S線の潮目の北側では低率のようである。

(インドマグロ)

インドマグロはジヤワ島南側の13°S以北では未だ全く出現しない模様であり2隻だけつれているのは恐らく15°S, 117—118°E附近と思はれる。

体長組成は141—180cmで中心は151—170cmにある。

(クロカワ)

クロカワの釣獲率は0.19で6,7月に比べ更に低率で年間の最低率となつている。

型は非常に大きい模様で201cm以上の大型が過半数を占めている。

(シロカワ)

ジヤワ沿海ではシロカワは比較的多い模様で夏、冬の2回率が高くなつている。

29年の夏は6月に0.45で最高率となり7,8月は0.35で同率となつている。

体長組成は比較的型が小さく中心は141—160cmにある。

（マカジキ）

マカジキは6月以降0.05—0.06で略同率となつている。このマカジキは3月から5月にかけてセイロン島附近からアンダマンニコバル諸島附近に出現したマカジキが次第にスマトラ沖合を南下してジャワ島南側に達したものの様で8月には既にロンボック水道附近に迄達している。

濠洲西方海区

表面水温は7月に比べて更に低下し 113°—115° E の間に於て17°—18°S26.0—26.5°c, 19°—21°c, 23.0—24.0°c で19°S以南が相當低温である。

漁況は7月に比べて全般に低下し特にキハダは著しく低下している。

（キハダ）

キハダは冬季間は稍率が高く、夏季は減少する模様で8月の釣獲率は1.21で年間の最低率を示している。

1隻の報告では113°—115°Eの間では16°—18°Sの間は比較的少く19°—21°Sの南よりで稍多くなつている。

（メバチ）

メバチの釣獲率は0.86で5月以降僅かずつ増加している模様である。但し3隻調査せる中2隻は0.5前後の率にすぎず 9°—12°S, 103°—105°E のジャワ島の西南側の1隻のみ1.75で率が高くなつている。

（ビンナガ）

ビンナガの釣獲率は2.39で5月の6.5, 6, 7月の3.5に比べ低下している。

113°—115°E の範圍では17°—19°Sの範圍が稍多く20°S以南では非常に少い様である。又104°—110°Eの範圍では13°—14°Sの間に多く12°S以北では非常に少い様である。

（クロカワ）

クロカワは釣獲率0.32で5月以降殆ど一定した率を示している。

小スンダ列島南側水域ではクロカワは27年11月—28年3月の間は比較的高率に出現しているが28年11月—29年3月の間は比較的低率である。然し兩年共冬季間は率が高く、夏季は低率となつており、太平洋方面と同様の夏季北上、冬季南下の現象がみられる。

（シロカワ）

6月以降では7月が稍率が高かつたが8月は6月と略同率の0.13となつている。

シロカワは小スンダ列島南側水域は比較的多いが特に多いのはジヤワ島以東の島よりで沖合程少くなる様である。

1隻の報告でも 113°—115°E の間では 17°S 以南は非常に少く、それより北側に多くなつている。

(マカジキ)

マカジキの率は0.08で7月の0.15より稍少くなつている。然し3隻調査した中西よりのジヤワ島西南の1隻は釣獲率0.18で稍率が高く、それより東南で操業した2隻は0.02—0.06程度の低率となつている。

ジヤワ沿海の項でものべた様にマカジキは春から夏にかけてアンダマンニコバル諸島方面からスマトラ島西岸沖合を経て南下している模様で6月から8月にかけてジヤワ島南側にまで達している。

スマトラ西岸沿海

7月は1隻調査されたにすぎないが8月は4+(1)隻に増加している。

漁場は0°—7°S, 91°—108°E の赤道反流域が主である。

水温はジヤワ島以東の水域が25—26.5°c程度の低水温なるに對し 28.2—29.2°c で比較的高い様である。

漁況はジヤワ以東の漁場が全般に6月以降キハダは減少しているのに對しスマトラ西岸沿海では7月以降稍高率となつている。又メバチはジヤワ以東が7,8月に増加しているのに対し減少し、ビンナガは6月以降同率となつている。

クロカワは4月以降除々に減少し又マカジキは7月と同率である。

(キハダ)

本年2月から4月の間釣獲率 5—7 の高率を示したキハダは東部印度洋全般にキハダの率が低下した　6月には2.0に低下したがジヤワ以東の漁場が尚低調を続けている　7月以降は逆に増加して7月3.25, 8月3.44の率となつている。

特に8月は後述する様に 70°—90° E の間の赤道反流北縁部にキハダが高率に出現している模様でスマトラ西岸沿海に於ても7月以降赤道反流域のキハダの率が増加している。

体長組成は6月以降中心は 131—140cm にあり中型63.4%、大型33.8%で小型は極めて少い。7月は中型が78.4%、大型18.9%で比較的型が小さかつたが之はジヤワ沿海、小スンダ, チモール沿海等も赤道反流域全般に型が小さかつた模様で8月に入つて再び型は大きくなつている。

(メバチ)

メバチの率は0.59で6月以降除々に減少している。8月は90°—108°Eの間では0°—2°Sの間は稍少く5°S附近に率が高い模様である。

体長組成はキハダの場合と同様7月は型が小さく小、中型が主であつたが8月は型が大きく、中型66.7%、大型27.2%となつている。

(ビンナガ)

ビンナガの釣獲率は1.83で6,7月に比べて僅かに増加している。ジヤワ以東の漁場では5,6月に最高率を示し7月以降減少して次第に西よりに移動している模様で主たる分布は12°S線に沿つて形成される潮目の南側部に多い。スマトラ西岸沿海に於ても6月には明かに南赤道流域に高率で赤道反流域は比較的低率であつたが8月の状況をみると95°E附近を境として西側の0°—2°S附近に率が高くなつている。之は赤道反流の北縁と北赤道流の南縁とで形成される潮目の南側と思はれる。

即ち0°—2°S, 90°—97°Eの2隻は釣獲率3.3—3.8程度であるが1°—2°S, 95°—96°Eの1隻は1.12にすぎず8月に入つてビンナガはかなり西よりに移動している様に思はれる。

(クロカワ)

クロカワの率は0.50で4—7月に比べ僅かに減少している。

6月の調査では北赤道流域及び赤道反流域は釣獲率0.60—0.75で稍高く、南赤道流域は0.21にすぎなかつたが7月は赤道反流域は0.66となり更に8月は0.50に減少している。之等の事から想像するにセイロン島周辺からアンダマンニコバル諸島方面にまで北上したクロカワは6月から7月にかけて赤道反流域にまで南下し8月は更に南下している様に思はれる。例えば1隻の調査では0°—1°S, 94°—95°Eでは0.71であるが5°S, 96°—97°Eでは1.24となつている。ハワイ方面でも7,8月には赤道反流域に最も多く分布しその一部は既に南赤道流域にまで南下している模様で印度洋に於ても殆ど同じ傾向の様に思はれる。

体長組成は中心が161—180cmにあり大型魚は少い様で7月の組成に比べると稍型が小さくなつている。

(シロカワ)

シロカワはジヤワ島以東の漁場に比べると低率であるが4月から6月の間は稍多く7,8月は0.07で同率となつている。

シロカワもクロカワと同様赤道反流域の5°S附近に多い様である。

(マカジキ)

マカジキは6月には釣獲率0.15であつたが7,8月は0.10で同率となつている。

6月には北赤道流域が0.25で率が高く、赤道反流及び南赤道流域は0.08となつており7月に入つて赤道反流域は0.13に増加し除々に南下している様に思はれる。

1隻の調査では0°—1°S 94°—95°Eでは0.04の低率であるが5°—6°S,96°—97°Eでは0.24となつて赤道反流域の中心部に多くなつている。

G 中部印度洋方面

一 セイロン海區、中部印度洋海区

セイロン海区

セイロン海区では4月13隻、5月19隻の調査を行つたが6月以降はモンスーンの時期に入つて操業船數は激減し6月1隻、7月0隻、8月1隻となつている。

8月の1隻の操業區域は0°—3°N, 73°—81°Eのセイロン島西南水域で水温は6月より稍高く27.7°—28.6°c流向はSSE, NNE 0.4′—1.1′である。

6月は5月に比べて水温も約1°c低下し流向も5月のNEに對し6月はSWと變り漁況もビンナガ、クロカワが増加した　他はキハダ、シロカワ、マカジキ等は低下したが8月には再びE方向の流れとなりキハダは著しく高率となつている。

クロカワ、マカジキ等は全般に南下している模様で低率である。

(キハダ)

3月に7.03の最高率を示したキハダは4月から6月にかけて次第に低下し特に6月は水温低下、流向變化等も影響したと思はれるが2.27の低率となつた。8月の1隻は釣獲率8.69で各漁場を通じて最高の率を示している。

後述する中部印度洋海區も5.4の高率でスマトラ島以西に於てキハダは高率で特にセイロン島南部は高率となつている。

(メバチ)

メバチも3月に1.46の最高率となり4月から6月の間は0.9—1.0の間で略一定の率であるが除々に低下しており8月には更に低下して0.65となつている。

逆に中部印度洋方面では8月には稍増加している模様で8月に赤道以南に南下しているかも知れない。

(ビンナガ)

ビンナガはセイロン海区では極めて少く赤道附近で僅かにとれる模様であるが6月には6°—7°N, 87°—88°Eで2.32の率となつており恐らく水温低下、流向變化等の海況變化が影響している様に思はれる。

8月の釣獲率は0.26で遙に減少している。

(クロカワ)

クロカワは3月の釣獲率0.48から6月の0.69まで除々に増加し8月には0.42に減少している。小スンダ列島南側の水域では冬季間は率が高く夏季は低率となつており太平洋方面と同様の夏季北上、冬季南下の季節移動をしている様に思はれる。

(シロカワ)

シロカワは小スンダ列島南側水域に比べると概して低率で3,4,5月の春季には0.09—0.12程度の率となり6月には0.03に低下している。8月には再び0.10に増加しているが何れにしても低率である。

(マカジキ)

セイロン海区では3月から増加し始めた模様で4月には釣獲率0.64で最高となり5月0.39,6月0.08と急激に減少している。このマカジキは5月にはアンダマンニコバル方面に移動している模様で6月以降スマトラ沖合方面に南下し7—8月にはジヤワ島からロンボツク水道方面に出現し始めている。恐らく28年11月に小スンダ列島南側に出現したマカジキはこの様な回游をしているものと推察されるが今後の調査によつて更に明かになるものと思はれる。

中部印度洋海區

8月は大型船4+(1)隻調査している。漁場は72°—90°Eの間の赤道反流域が主である。水温は2°—3°S, 72°—73°E附近28.1—28.4°c N, SE 0.4—0.7′ 4°—5°S 76°—77°E 27.1—27.9°c E, SE 0.3—0.6′, 2°—4°S, 80°—83°E 28.1—28.6°c, SW 0.2—0.5′となつている。

5月の調査に比べるとキハダは同率でメバチ、ビンナガは稍増加しクロカワ、マカジキは減少している。

(キハダ)

キハダの釣獲率は5.38で5月の5.35と同率である。最も率の高い船は釣獲率10.33に達しているが75°Eを境として西側は特に高率で4°—5°S, 76°—77°Eでは回數11回、鈎数22115, 尾數1388尾、釣獲率6.28であるが2°—3°S, 72°—73°Eでは同數8回、鈎数15551, 尾數2498尾、釣獲率16.06となつている。又86°—89°Eの間では2°—3°Sは4.16であるが10°—11°Sでは0.95にすぎない。

体長組成は121—140cmの中型魚が77.4%で最も多く小型17.3%で之に次ぎ大型は5.3%にすぎない。

（メ　バ　チ）

メバチは5月は釣獲率0.93であつたが8月は1.20で稍増加している。

メバチも赤道反流の北線部に多い模様で 86°—89°E の間では 10°—11°S 0.54 にすぎないが 2°—3°S では1.48となつている。

体長組成は中型魚が主で57.1%を占め大型も20.8%含まれ小型は22.2%含まれている。

（ビ　ン　ナ　ガ）

ビンナガは5月の釣獲率は1.24であつたが8月は1.60に増加している。

86°—89°E の間で操業した1隻の報告によれば 2°—3°S では釣獲率0.34の低率であるが10°—11°S の間では9.78の高率となつている。又72°—77°E の間で操業した1隻は 2°—3°S 0.45, 4°—5°S, 0.23 となつており大体ビンナガは赤道反流の南側の潮目に最も多く分布し、次いで北側の潮目に多く中心部は比較的少い様である。

（ク　ロ　カ　ワ）

クロカワは5月には釣獲率0.70で稍率が高かつたが8月は平均0.33に低下している。

クロカワは8月にはかなり南下している模様で 72°—77°E の間では 2°—3° S 0.26, 4°—5°S 0.45, 又86°—89°E の間では 2°—3° S 0.17, 10°—11°S 0.35 となつている。

この体長組成は中心が 161—190cm にあつて稍型が大きいが 80°E 以東の方がその西側より型が大きい様である。

（シ　ロ　カ　ワ）

シロカワは比較的少く5月も釣獲率0.06にすぎなかつたが8月も0.07にすぎない。シロカワもクロカワと同様赤道反流の北縁では少く南側に多い様である。

（マ　カ　ジ　キ）

マカジキは5月には0.35で稍率が高かつたが8月には0.12に減少している。

マカジキは赤道反流の中心部5°S附近に多い模様で北縁部は稍低率である。

H 北部太平洋方面

35°—40°N, 150°—180°E の海域

3隻調査しているが漁場は何れも 36°—40°N, 160°—169°E の間である。

水温は 20.4°—24.8°c 流向は NE 0.5—1.0′ で北太平洋流の流域と思はれる。

漁況はメバチ、マカジキを主としてビンナガ、クロカワ、メカジキ等が少量混っている。

(メバチ)

メバチの釣獲率は1.58で28年8月の0.76に比べて率が高い。

28年の調査でも160°Eを境として西側はメバチの率は低く東側は高い様である。

(ビンナガ)

ビンナガは平均0.03で極めて低率である。

28年8月も0.05で本年と略同率である。

(クロカワ)

クロカワは平均0.05で極めて少いが型は大きいものゝ様である。28年8月も0.04で本年と同率である。クロカワは5—6月頃赤道附近から北上したものが台灣東海から小笠原附近まで北上しており7月には既に南下する模様であるが北上群の中の大型のものは亜熱帯收斂線を突破して伊豆諸島方面にまで出ており之等がそのまゝ秋から冬にかけて亜熱帯收斂線以北に散在しているものと思はれる。

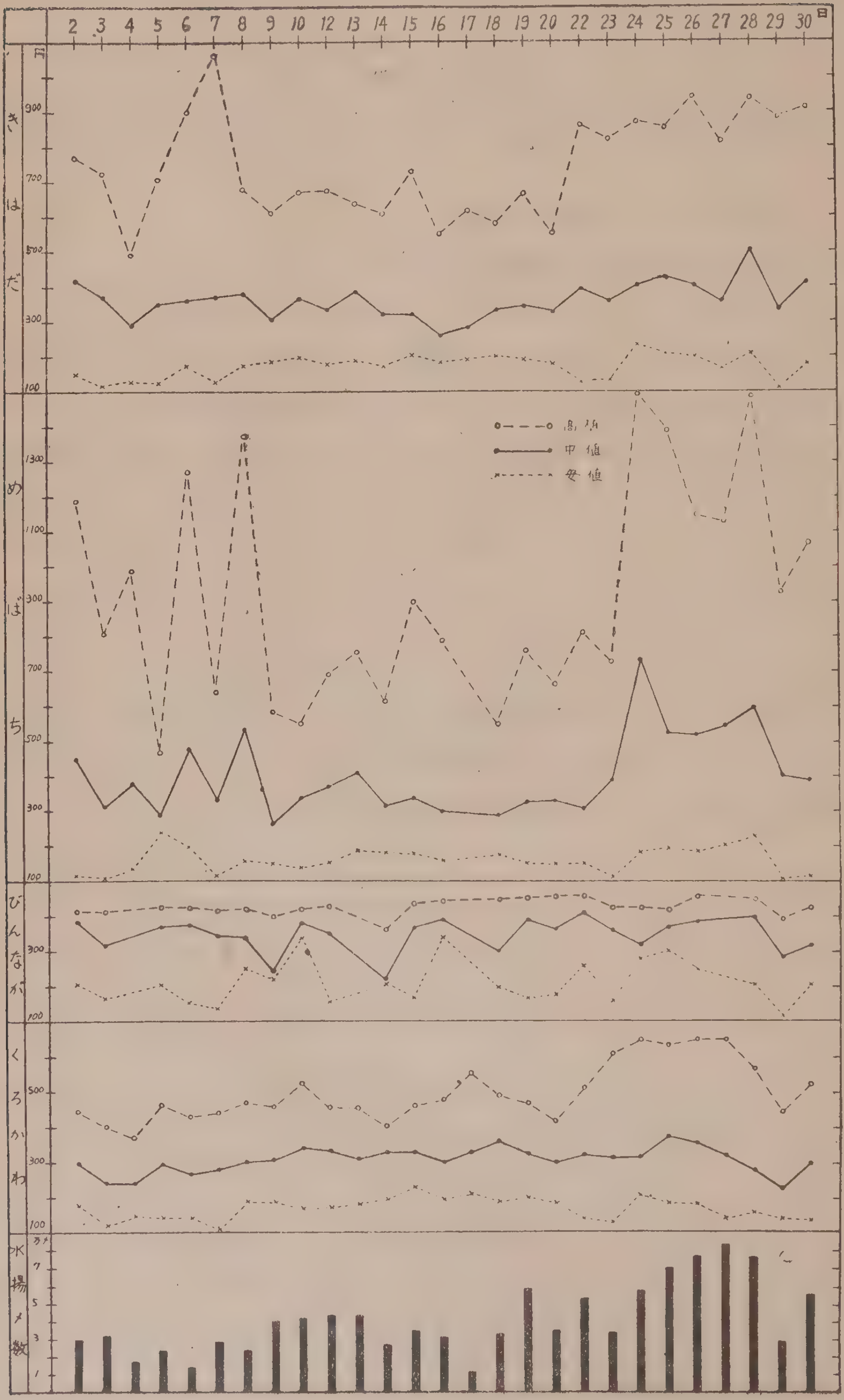
(マカジキ)

マカジキの率は平均0.71で最も率の高い船は0.93に達している。

28年8月の0.28に比べると本年は率が高い様に思はれる。

29年3月から5月に小笠原諸島附近を中心として相當高率に出現したマカジキが5月から6月には次第に伊豆諸島方面に北上しており8月には160°—170°Eの35°N以北にまで北上したのではないかと思はれる。

鮪類水揚價格表（三崎）29年12月



鮪標識放流について

1 昭和29年12月18日から30年1月20日迄に標識放流の委託をなした船数は7隻（標識40本）である。

2 上記の期間内に放流実施の報告のあつた船数は4隻、放流尾数19尾である。

放流実施船名及び放流実施の概要

船　名	標識番号	放流年月日	放流位置	魚種（尾数）
5明神丸	A 0646 —0649	26. 11. 20 12. 1	18°—19°S 152°—153°E	かつを (2) ふうらい (1) かます (1)
8崎吉丸	A 0601 —0605	29. 11. 24 12. 7	16°S,147°E 24°S,154°E	きはだ (5)
11明神丸	A 0486 —0490	29. 12. 1 12. 7	8°—12°S 113°—116°E	きはだ (4) めばち (1)
富山丸	A 0801 —0805	29. 12. 4 12. 5	18°—19°S 116°—117°E	きはだ (5)

Aug. 1954

月別、漁場別、鮪類漁獲調査表

Ground 漁場		Area 操業區域	Boats 調査隻數	Water temp 水温(°C)	流向 Current 流速	操業 Station 回数	Baskets 漁具数	Hooks 鈎数		YF きはだ	BE めばち
E. of 140°W以東		6—8°N 136—135°W	1	27.4 27.6	SSE 0.9 W 1.2 NNE	25	10,223	51,115	尾數 鈎獲率 百分率	1252 2.45 44.7	1343 2.63 47.9
SW of Hawaii ハワイ南西	N. of 5°N 以北	6—11°N 174—171°W	1	27.4 28.7	SE 1.0 WSW 0.5	18	6,660	26,640	No. fish catch rate % in catch	151 0.57 14.9	413 1.55 40.6
	S. of 5°N 以南	0—12°N 180—167°W	1	26.0 28.7	W/S-NW/W E—NE	37	14,275	57,100		1389 2.43 55.2	520 0.91 20.7
	Total 計	0—12°N 180—167°W	2	26.0 28.7	NW/W—WSW NE—SE	55	20,935	83,740		1540 1.84 43.6	933 1.11 26.4
SE of Hawaii ハワイ南東		2°S—10°N 162—151°W	1	21.5 28.4	SE 1.0—4.0	34	13,764	53,950		1007 1.87 35.2	944 1.75 33.0
Southern Trust Terr. 南洋南部	W. of 170°E 以西	3°S—11°N 140—170°E.	4	27.0 29.9	W.SE 0.5	63	19,318	92,090		1625 1.76 59.6	516 0.56 18.9
	E. of 170°E 以東	2—7°N 171—179°E	3	27.3 28.7	E/S 0.8 SE 0.5	53	18,207	85,378		1659 1.94 52.5	463 0.54 14.6
	Total 計	3°S—11°N 140—179°E	7	27.0 29.9		116	37,525	177,468		3284 1.85 55.8	979 0.55 16.6

（昭和 29 年 8 月操業分）

（別 表 1）

ぐ AL びんなが	ろ BT 黒まぐろ	SBF いんどまぐろ	か BM くろかわ	WM しろかわ	じ SM まかじき	BB めかじき	き SF ばしよう	かつを SKJ	Misc 雑	SK さめ	Total 計	記事	
			154 0.30 5.5	24 0.05 0.9	16 0.03 0.6	4 0.01 0.1			8 0.02 0.3		2801 5.48 100	サメ未調査隻数 体長測定船數	1 1
	1 0.0 0.1		348 1.31 34.3	2 0.01 0.2		1 0.0 0.1			100 0.38 9.8		1016 3.81 100		1 1
71 0.12 2.8			374 0.65 14.9	17 0.03 0.7	4 0.01 0.2	1 0.0 0.0	8 0.01 0.3		15 0.03 0.6	117 0.20 4.6	2516 4.41 100		0 0
71 0.08 2.0	1 0.0 0.0		722 0.86 20.4	19 0.02 0.5	4 0.0 0.1	2 0.0 0.1	8 0.01 0.2		115 0.14 3.3	117 0.14 3.3	3532 4.22 100		1 1
4 0.01 0.1			535 0.99 18.7	13 0.02 0.5	2 0.0 0.1	6 0.01 0.2	1 0.0 0.0		3 0.01 0.1	344 0.64 12.0	2859 5.30 100		0 0
5 0.01 0.2	3 0.0 0.1		547 0.59 20.1	4 0.0 0.1		1 0.0 0.0	18 0.02 0.7	2 0.0 0.1	6 0.01 0.2		2727 2.96 100		4 0
3 0.0 0.1			738 0.86 23.3	19 0.02 0.6		4 0.0 0.1	1 0.0 0.0		275 0.32 8.7		3162 3.70 100		3 1
8 0.0 0.1	3 0.0 0.1		1285 0.72 21.8	23 0.01 0.4		5 0.0 0.1	19 0.01 0.3	2 0.0 0.0	281 0.16 4.8		5889 3.32 100		7 1

漁場	操業区域	調査隻数	水温(°c)	流向 流速	操業回数	漁具数	鈎数		ま	
									きはだ	めばち
Solomons ソロモン	0—15°S 136—170°E	14	24.0 30.2	NNW —W/S 0.3—1.7	299	110,411	523,673	尾数 鈎獲率 百分率	11948 2.28 44.0	1203 0.23 4.4
N. Caledonia ニューカレドニヤ	13—24°S 156—176°E	11	21.2 27.3	E—NE 0.1—0.6	248	98,184	443,053		4468 1.01 16.4	777 0.18 2.9
Banda Florez バンダ フロレス	4°N—7°S 123—147°E	2	26.1 28.9		29	10,480	41,920		827 1.97 62.7	138 0.33 10.5
Lesser Sunda 小スンダ チモール	9—13°S 115—120°E	2 (2)	25.6 26.7		28	10,404	45,390		765 1.69 36.6	584 1.29 27.9
Java ジヤワ	4—15°S 98—118°E	7 (2)	25.2 28.5	ENE 1—2 NW	133	44,379	206,320		3188 1.54 26.2	3432 1.66 28.2
W. of Australia 濠洲西方	9—21°S 103—116°E	3 (3)	26.1 26.5		39	12,450	62,450		756 1.21 24.0	539 0.86 17.1
W. of Sumatra スマトラ西岸	0—9°S 90—108°E	5 (3)	28.2 29.2		137	56,564	238,636		8219 3.44 51.0	1398 0.59 8.7
Ceylon セイロン	0—3°N 73—81°E	1	27.7 28.6	SSW —NNE 0.4—1.1	19	8,040	32,160		2794 8.69 84.9	209 0.65 6.3
Central Indian Ocean 中部印度洋	0—11°S 72—89°E	5 (2)	25.8 28.9	NW 1.0 SE, SSE 0.3—0.9	122	47,571	211,659		11399 5.38 61.1	2534 1.20 13.6
35—40°N 150—180°E	36—40°N 160—169°E	3	20.4 24.8	NNE —NE 0.5—1.0	49	13,795	59,380			938 1.58 57.6
Total 計		58			1333	494,725	2,230,914		51447 2.25 40.2	15951 0.70 12.5

(別表 1)

ぐ　ろ			か　じ　き					かつを	雑	さめ	計	記事
びんなが	黒まぐろ	いんどまぐろ	くろかわ	しろかわ	まかじき	めかじき	ばしよう					
11988			749	219	82	37	271	108	384	171	27160	サメ未調査隻数 10
2.29			0.14	0.04	0.02	0.01	0.05	0.02	0.07	0.03	5.18	
44.1			2.8	0.8	0.3	0.1	1.0	0.4	1.4	0.6	100	体長測定船數 5
19366	7		605	110	964	83	26	83	536	231	27256	
4.37	0.0		0.14	0.02	0.22	0.02	0.01	0.02	0.12	0.05	6.15	8
71.0	0.0		2.2	0.4	3.5	0.3	0.1	0.3	2.0	0.8	100	1
			66	146	2	14	27		21	78	1319	
			0.16	0.35	0.0	0.03	0.06		0.05	0.19	3.15	1
			5.0	11.1	0.2	1.1	2.0		1.6	5.9	100	0
281		167	112	123	34	10			16		2092	2
0.62		0.37	0.25	0.27	0.07	0.02			0.04		4.61	(2)
13.4		8.0	5.4	5.9	1.6	0.5			0.8		100	1
3590		369	397	719	134	54	1	18	93	181	12176	5
1.74		0.18	0.19	0.35	0.06	0.03	0.0	0.01	0.05	0.09	5.90	(2)
29.5		3.0	3.3	5.9	1.1	0.4	0.0	0.1	0.8	1.5	100	3
1492		8	202	80	48	15			6	6	3152	2
2.39		0.01	0.32	0.13	0.08	0.02			0.01	0.01	5.05	(2)
47.3		0.3	6.4	2.5	1.5	0.5			0.2	0.2	100	0
4358			1195	178	244	68	16		299	146	16121	4
1.83			0.50	0.07	0.10	0.03	0.01		0.13	0.06	6.75	(2)
27.0			7.4	1.1	1.5	0.4	0.1		1.9	0.9	100	1
85			135	32	25	4	7				3291	
0.26			0.42	0.10	0.08	0.01	0.02				10.23	1
2.6			4.1	1.0	0.8	0.1	0.2				100	0
3390			691	155	245	88	17		68	60	18647	4
1.60			0.33	0.07	0.12	0.04	0.01		0.03	0.03	8.81	(1)
18.2			3.7	0.8	1.3	0.5	0.1		0.4	0.3	100	2
16			28		419	14	1		41	170	1627	
0.03			0.05		0.71	0.02	0.0		0.07	0.29	2.74	0
1.0			1.7		25.8	0.9	0.1		2.5	10.4	100	0
44649	11	544	6876	1841	2219	404	394	211	1871	1504	127922	
1.96	0.0	0.02	0.30	0.08	0.10	0.02	0.02	0.01	0.08	0.06	5.61	42
34.9	0.0	0.4	5.4	1.4	1.7	0.3	0.3	0.2	1.5	1.2	100	16

Size Composition

月別、漁場別、鮪類体長組成（昭和29年8月操業分）

（別表 2）

YF

BE

魚種	測定船數	漁場	操業区域	操業回数		50 cm以下	51—60	61—70	71—80	81—90	91—100	101—110	111—120	121—130	131—140	141—150	151 cm以上	計	漁獲尾數
	1	E of 140°W以東	6—8°N 136—135°W	25	尾数 %								14 3.1	59 12.9	113 24.7	121 26.5	150 32.8	457 100	1252
き	1	SW of Hawaii ハワイ南西 (5°N以北)	6—11°N 174—171°W	18									3 6.0	17 34.0	14 28.0	12 24.0	4 8.0	50 100	151
	1	南洋南部 (170°E以東)	6—7°N 171—173°E	15									7 7.1	19 19.4	29 29.6	28 28.6	15 15.3	98 100	194
	4	ソロモン Solomone	0—18°S 136—166°E	95								24 2.4	110 11.2	282 28.7	277 28.2	226 23.0	64 6.5	983 100	2826
は	1	N. Caledonia ニューカレドニヤ	19—20°S 163—164°E	20										10 7.9	32 25.4	54 42.9	30 23.8	126 100	380
	1	Sunda 小スンダ チモール	10—11°S 115—117°E	17								6 2.8	58 26.9	71 32.9	57 26.4	23 10.7	1 0.5	216 100	614
だ	2	ジャワ Java	10—11°S 108—115°E	27							31 8.3	27 7.2	42 11.2	22 5.9	67 17.9	84 22.4	102 27.2	375 100	495
	1	スマトラ 西Sumatra岸	1—2°S 95—96°E	50									5 2.7	20 10.9	96 52.5	59 32.2	3 1.6	183 100	3094
	2	Indian Ocean 中部印度洋	2—11°S 72—89°E	40								30 5.9	58 11.4	168 33.1	225 44.3	23 4.5	4 0.8	508 100	3921
	〃	〃	〃	〃		80 cm以下	81—90	91—100	101—110	111—120	121—130	131—140	141—150	151—160	161—170	171—180	181 cm以上	〃	〃
め	1	E of 140°W以東	6—8°N 136—135°W	25	〃				2 0.4	24 4.9	83 16.8	131 26.5	78 15.8	81 16.4	63 12.8	26 5.3	6 1.2	494 100	1343
	1	ハワイ南西 (5°N以北)	6—11°N 174—171°W	18					10 10.1	21 21.2	23 23.2	10 10.1	14 14.1	15 15.2	4 4.0	2 2.0		99 100	413
	1	南洋南部 (170°E以東)	6—7°N 171—173°E	15						22 13.9	43 27.2	42 26.6	31 19.6	10 6.3	8 5.1	2 1.3		158 100	193
ば	4	ソロモン	0—18°S 136—166°E	95					8 4.8	20 12.0	44 26.3	47 28.1	24 14.4	13 7.8	10 6.0	1 0.6		167 100	323

ち	1	ニューカレドニヤ	19—20°S 163—164°E	20						1 9.1	3 27.3	4 36.4	1 9.1	1 9.1	1 9.1			11 100	45
	1	小スンダチモール	10—11°S 115—117°E	17					1 0.9	10 8.6	11 9.5	30 25.9	47 40.5	16 13.8	1 0.9			116 100	227
	3	ジャワ	4—15°S 98—117°E	58					32 5.0	54 8.5	48 7.6	64 10.1	210 33.1	165 26.0	35 5.5	18 2.8	9 1.4	635 100	2471
	1	スマトラ西岸	1—2°S 95—96°E	50							2 6.0	12 36.4	10 30.3	8 24.2	1 3.0			33 100	128
	1	中部印度洋	2—11°S 72—89°E	40						19 9.0	28 13.2	65 30.7	56 26.4	29 13.7	14 6.6	1 0.5		212 100	982
びんなが	〃	〃	〃	〃		40 cm以下	41—50	51—60	61—70	71—80	81—90	91—100	101—110	111—120	121 cm以上			〃	〃
	2	ソロモン	12—14°S 163—166°E	43	〃						28 16.7	108 64.3	31 18.5	1 0.6				168 100	2952
	1	ニューカレドニヤ	19—20°S 163—164°E	20						1 1.2	11 13.2	55 66.2	14 16.9	2 2.4				83 100	1091
	1	小スンダチモール	10—11°S 115—117°E	17							1 2.1	19 39.6	19 39.6	9 18.7				48 100	274
いんどまぐろ	〃	〃	〃	〃		100 cm以下	101—110	111—120	121—130	131—140	141—150	151—160	161—170	171—180	181—190	191—200	201 cm以上	〃	〃
	1	ジャワ	4—15°S 98—117°E	31	〃						5 14.3	18 51.4	10 28.6	2 5.7				35 100	350

AL

SBF

（別表 2）

魚種	測定船數	漁場	操業區域	操業回數		140 cm 以下	141—150	151—160	161—170	171—180	181—190	191—200	201—210	211—220	221—230	231—260	261 cm 以上	計	漁獲尾數
くろかわ	1	140°W以東	6—8°N 136—135°W	25	尾数 %		2 2.1	2 2.1	4 4.2	8 8.3	5 5.2	14 14.6	19 19.8	11 11.5	8 8.3	16 16.7	7 7.3	96 100	154
	1	ハワイ南西 (5°N以北)	6—11°N 174—171°W	18		2 3.4	6 10.2	7 11.9	6 10.2	6 10.2	5 8.5	7 11.9	2 3.4	9 15.2	3 5.1	6 10.2		59 100	348
	1	南洋南部 (170°E以東)	6—7°N 171—173°E	15		3 2.3	3 2.3	4 3.1	16 12.3	48 36.9	25 19.2	5 3.8	4 3.1	8 6.2	8 6.2	6 4.6		130 100	398
	4	ソロモン	0—18°S 136—166°E	95		4 3.3	9 7.4	10 8.3	14 11.6	19 15.7	8 6.6	6 5.0	9 7.4	15 12.4	15 12.4	11 9.1	1 0.8	121 100	314
	1	ニューカレドニヤ	19—20°S 163—164°E	20				6 15.8	1 2.6	6 15.8	15 39.5	1 2.6		5 13.2	2 5.3	2 5.3		38 100	110
	1	小スンダチモール	10—11°S 115—117°E	17				1 5.0	2 10.0	1 5.0	4 20.0	2 10.0	1 5.0	2 10.0	4 20.0	3 15.0		20 100	20
	1	ジャワ	10—11°S 109—112°E	15							2 22.2	1 11.1	1 11.1	2 22.2	1 11.1	2 22.2		9 100	35
	1	スマトラ西岸	1—2°S 95—96°E	50			1 1.9	6 11.3	16 30.2	20 37.7	2 3.8	2 3.8		6 11.3				53 100	320
	2	中部印度洋	2—11°S 72—89°E	40			2 2.9	3 4.3	15 21.4	18 25.7	16 22.9	6 8.6	4 5.7	2 2.9	4 5.7			70 100	246
しかろわ	1	ジャワ	10—11°S 109—112°E	15		1 2.6	16 42.1	14 36.8	7 18.4									38	97
まかじき	〃	〃	〃	〃		100 mc 以下	101—110	111—120	121—130	131—140	141—150	151—160	161—170	171—180	181—190	191—200	201 cm 以上	〃	〃
	1	ジャワ	10—11°S 109—112°E	15	〃								8 10.0					8 100	19

謹賀新年

祝三浦市制

五洋水産株式會社

本社 東京都千代田区丸ノ内2の29（丸ビル6階）
三崎営業所 神奈川県三浦市三崎町二町谷
石巻出張所 石巻市門脇75

丸高水産株式會社

本社 東京都中央区小田原町二の四
三崎出張所 神奈川県三浦市三崎町
館山出張所 館山市丸高水産館山冷蔵庫

柳下漁業株式會社

社長 柳下彌三郎
神奈川県三浦市三崎町日の出四一
電話 三崎 四四六

寶幸水産株式會社

本社 東京都中央区新富町三の二
三崎営業所 神奈川県三浦市三崎町宮城五

大榮漁業株式會社

本社 名古屋市中区伊勢町二の三
出張所 神奈川県三浦市三崎町海南三三
大栄無線 神奈川県三浦市三崎町花暮七

東貿易株式會社

代表取締役 石關自助

東京都千代田区丸ノ内2の2（丸ビル）

謹賀新年

祝三浦市制

大都魚類株式會社

本　社　東京都中央区築地5の1　電話築地（55）9013
三崎出張所　神奈川県三浦市三崎町仲崎190

大成水産株式會社

本　社　東京都千代田区丸ノ内3の8（三菱仲六号館）
三崎事業所　神奈川県三浦市三崎町仲崎142　電話三崎379

神奈川縣鰹鮪漁業者協會

会長　菅野　進
主事　水戸邦雄

神奈川県三浦市三崎町　電話375

三崎沿岸漁業協同組合連合會

会長　宇田川勝次

神奈川県三浦市三崎町西野92　電話30. 211. 408
製函部　電話579の甲

製氷、冷蔵、凍詰、餌料

三崎遠洋漁船製氷株式會社

取締役社長　四宮秀雄

神奈川県三浦市三崎町六合2446　電話356. 372

株式会社

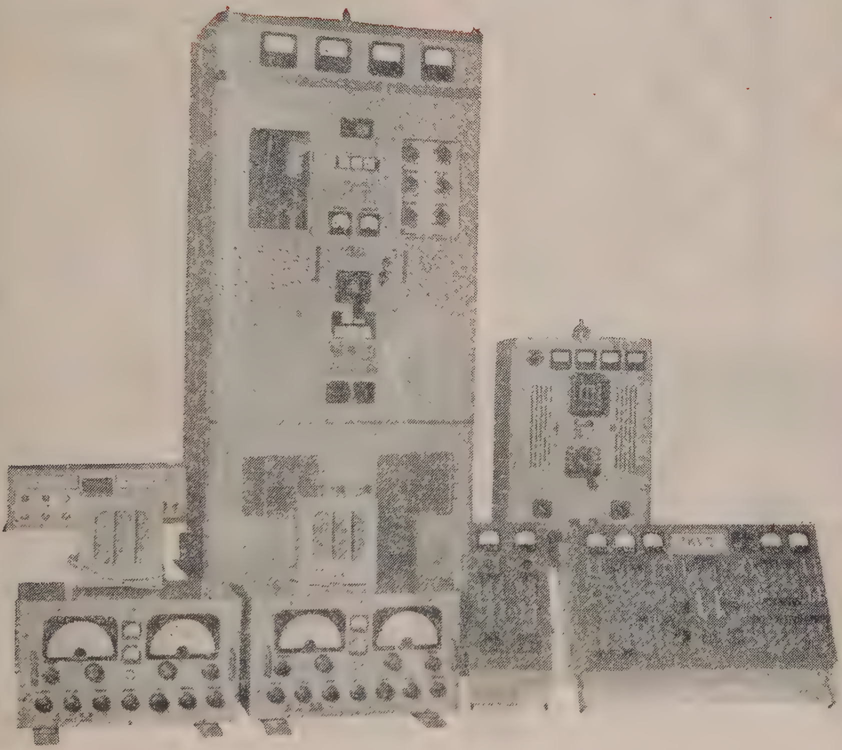
横濱興信銀行三崎支店

神奈川県三浦市三崎町花暮字仲の町123
電話800～804

Hattori

無線通信装置

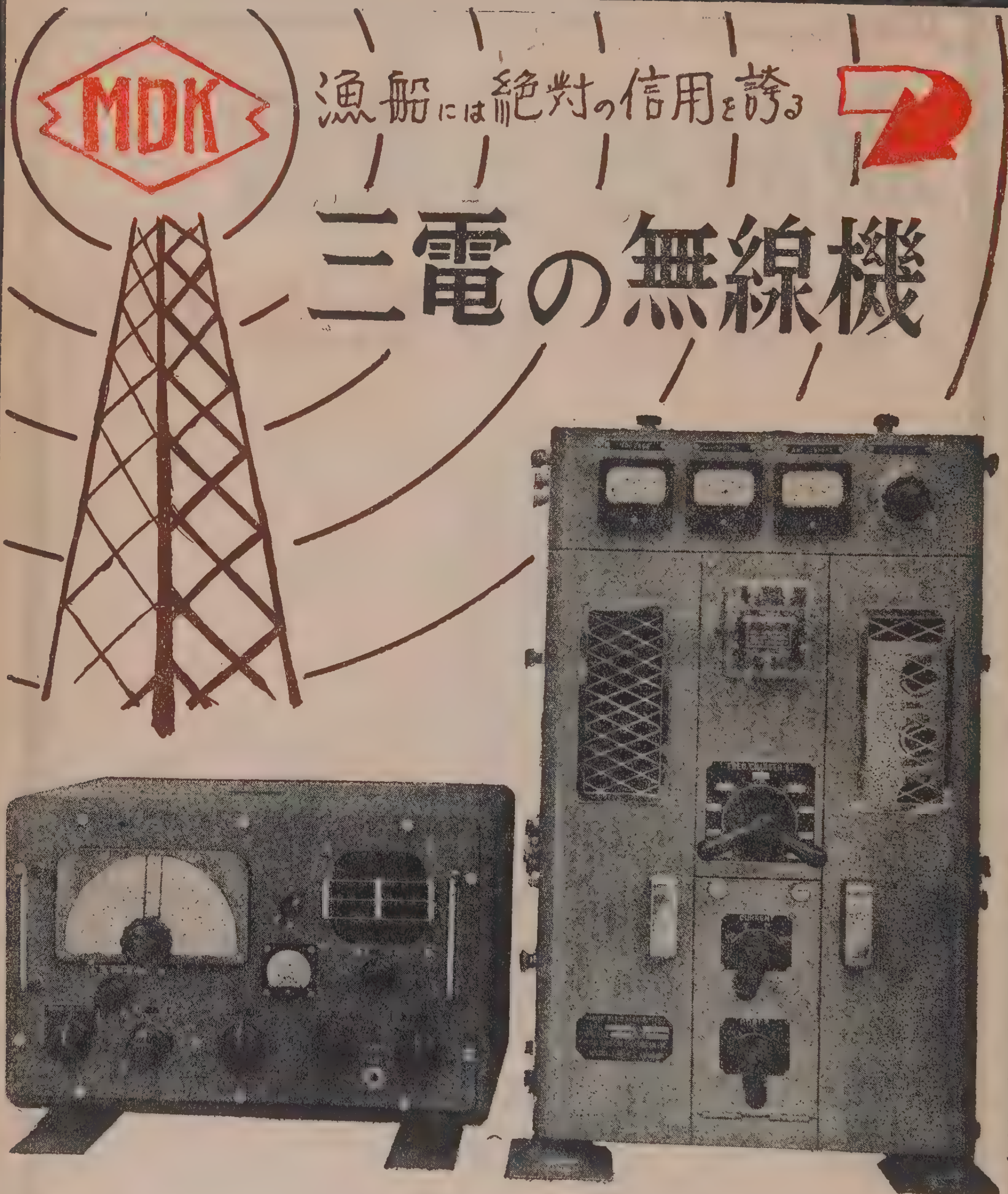
鮪漁船には充実せる無線機を！



本社　東京都港区麻布竹谷町2番地

株式会社　**服部電機製作所**

TEL (45) 2693.4993.9225～6


MDK
漁船には絶対の信用を誇る
三電の無線機

株式會社　三崎無線電機製作所

本社營業所　神奈川縣三浦郡三崎町仲崎187
TEL. 543. 460ノ乙番
八戸營業所　八戸市鮫町　東北無線電機工業所
TEL. 2577番
出張所　浦賀、深浦、函館

米國における鋼線マグロ延繩試驗報告

——太平洋水産研究所（ホノルル）報告——

マーケツト・ニユース・サービス（サンペドロ版）

（訳文　神奈川県水産試験場漁撈部）

I．試験船・航海目的

ジヨン・アール・マツニング号　第21次航海

1.　新試験延縄漁具の海洋での試験実施

2.　延縄漁具の深度を決定する為に測深管を使用することの実用性の試験

3.　特殊な沿岸沖と商業的漁業海面との釣獲率の比較による中層マグロの分布及び資源量の研究

4.　カツオ、ビンナガ及びキハダの胃袋の蒐集及保存によるマグロ類の食餌にもとずく生物学的資料の作製

5.　マグロの食餌及生産力調査の為の定量的中層採水の実施

6.　日中移動中の魚群の視界上の形跡の研究

7.　日中移動中の魚群に対する標準的曳縄の実施

8.　中層採水及測温によるハワイ諸島風下側の海洋学的研究

9.　サメ及カヂキの形態測定資料の蒐集

航海経過

7月15日　パールハーバー出港
7月16日17日　ワイナエ沖の漁具試験実施
7月17日　パールハーバー帰港
7月22日　漁場向けパールハーバー出港
7月23〜28日　漁場地点にて操業従事
7月29日　パールハーバー帰港

結　果

1.　試験的鋼線延縄漁具の海上試験はワイアナエ沖の保護海面で遂行された、新漁具は枝縄を幹縄に取つける方法が今までの漁具とは異つている。

今までの漁具に用いられていたAK型のスナツプ（枝縄と幹縄のとりつけ金具）に対する代用として三つの型の枝縄の取付具が計画された。是等はキーホール具（鍵穴）、コークスクリユー（螺旋状栓抜き）及びストラフアンガー（帯環につりさがつたもの）と名づけられた。キーホール及びコークスクリユー具は普通のものより効率は悪かつた。

ストラフアンガーは機械と手と両方でできたが投縄する時間は非常に遅かつた。併しながら水中でのこの具の動きは、今までのものより秀れておりもつれが少いので揚縄時間は極めてはやかつた。船を港に帰し、投縄の欠陥を取除くべく試験した。鋼線漁具の29鉢全部が改造されてストラフアンガーの型に取替えられた。この改造漁具で1航海5地点で操業試験を行つた。最初の本漁具の作動のでき栄はよくなかつた。第一地点で枝縄の⅓が投縄に伴う機械的困難性のために投縄するのに失敗した。併し、本具の調整により各地点で平均10％以下に低めることができた。投縄する時間は1鉢で平均2分54秒であつた。揚縄時間は遅く、1鉢平均5分45秒であつた。この時間のロスの多くはストラフアンガーの取付けがウインチドラムの上にきてウインチをストツプする必要のためのものである。水中での漁具の作動は優秀でもつれが少なかつた。

THE TUNA CLIPPER
OF THE PACIFIC

アメリカ鮪漁船　　サン・キング号

2.　測深管は900フイートの中層温度計（バチサーモグラフ）に一対のチユーブをとりつけて目定めを行い、70尋にまで下げ

た。チューブの深さは中層温度計の深さを約7％超えていた。一対のチューブの示度は2尋以内で一致した。本航海の最初に用いたチューブは、5年以上もたつており或るチューブの中身は示度がいかがわしい程低下していた。二度目に使用した新しいチューブの結果はグツとよかつた。

新しいチューブを鋼線のストラフアインガー具の5鉢の中の2鉢の各枝縄にとりつけた。でき上つた結果は、拡延された縄の浮子の距離を測定することによつて矯正された。鋼線漁具29鉢分の中23鉢には中央の枝縄にチューブをとりつけた。

平均深度は120尋にわたる最後の鉢で82尋であつた。

2地点では、ベンデツクスの音響測深儀で幹縄を出してチューブの深さを照合しようと試みたが、縄はグラフには出なかつた。

測深管はよく計測された。延縄で深度をとつている間に屢々測深管は実際に縄のある場所よりずつと深く記録された。従つてこの測深具による記録深度が公海での延縄に充分価値あるものかどうかは更に試験を行つた後でなければいえない。

3. 延縄操業がラナイ及ハワイの風下側の5点で行われた。鋼線漁具29鉢と綿糸漁具30鉢で何れも1鉢に11本の釣針を有するものが初めの2操業地点（第1操業地点及び第3操業地点）で行われた。この2点の操業以後、ウインチの故障で鋼線漁具20鉢及び綿漁具30鉢だけしか第5地点では行えなかつた。第5地点での、揚縄中日本製のラインホーラーがこわれ綿漁具の最後の9鉢はローエ・ウインチで補つた。

残りの2操業地点では鋼線漁具だけを使用した。

5つの操業地点での漁獲は鋼線漁具で計136鉢即ち延1.196本の釣鈎（はずれた枝縄を含む）を使用しキハダ2、バチ4、サメ4、Alepisaurus 3、全マグロに対する釣獲率は、鈎100本に0.50であつた。

綿糸漁具での漁獲は、90鉢延鈎針979本でキハダ1、メヂ1、クロカワ2、サメ7、Alepisaurus 3、全マグロに対する釣獲率は鈎100本に0.31の割合であつた。両漁具とも多くのマグロをとることは出来なかつたけれども、明らかに鋼線漁具の方が綿漁具より効果はあつた。（今後共継続される）

（1954・9・3 記事）

II. 試験船

オーショニツク号及びブラザーズ号　第1次航海

オーショニツク及びブラザーズ号は48及49フイートのアラスカ大鮃漁船で各船の定員は計3名であつた。

航海目的

鋼線延縄漁具を使用してのライン諸島の近海のキハダマグロ群を商業的に漁獲する。

航海経過

1954年5月20日ホノルル発、同月27日パルミラ島基地着、6月3日より同月14日の10日間、フアンニング島及クリスマス島近海で操業、同年6月23日ホノルルに帰着

結果

両船共各10日間操業した、その中7日間はフアンニング島で3日間はクリスマス島で行つた。オーショニツク号は平均一日425の釣針を使用し、ブラザーズ号は1日平均320の鈎を使用した、ステンレステール製の幹線は各々1600尋の巻わくの中にできあがつており、幹縄は投縄の際釣針14本毎（135フイート）に浮子で吊つている。

全て操業は、島から15マイル以内で行われた。

両船共毎日同様な一般的海域で操業されたが、ブラザーズ号のキハダの釣獲率は釣針100本に対し、約4.0尾のキハダをとつており一方オーショニツク号のキハダの釣獲率は1.4という結果となつている。漁具構成上の唯一の相違はブラザースが浮子縄を終始25尋を使用したのに対しオーショニツク号は夫々に3対1の割合で10尋と25尋の浮子縄を使用したということである。

オーショニツク号は、キハダ約3206ポンドを水揚した。ブラザーズ号は約4.863ポンドを水揚した。キハダの他にメバチ3尾、クロカワ7尾もまた水揚された。

キハダの漁獲は略3つのグループの魚から成立つている。即ち45ポンドと75ポンド及び125ポンドである。平均の体重は86ポンドであつた。

延縄でとれたキハダの相当の高率がサメに喰われた。オーショニツク号は44％をやられており、ブラザーズ号も相当にとれたがサメに50％がくわれていた。

この営利を目的とした試験ではキハダの漁獲は非常に貧弱であつた。この理由には次の二つの理由が考えられる。即ち、この極度なサメの被害は島に近づき過ぎて操業しすぎた為の様である。全く新しい型の漁具を以てしては明らかに適当な深さに適していなかつた。

これ等の船は、更に大きな試験船コモンウエルス号を伴つて赤道附近を試験することを計画している。

（1954.9.21 記事）

III. 試験船

オーショニツク号及びブラザーズ号　第二次航海、コモンウエルス、第一次航海

コモンウエルス号は110フイートのスクーナーを改装したものオーショニツク及びブラザーズ号には各三人がコモンウエルスには5人が乗組んだ。

航海目的

鋼線延縄漁具を用いてライン諸島附近のキハダマグロの分布を営利的に漁獲するため。

航海経過

1954年7月14日ホノルル出港同年8月21日帰港

結果

三隻の船は、主としてクリスマス島近海距岸70マイルまでの間で操業し一隻計29日間漁獲に従事した。各船当り1日平均約500本の鈎を使用し航海に対し計約14.700本であつた。漁獲はキハダ240でその中32〜13パーセントがサメ喰であつた。全体の漁獲率は鈎100本に対し1.63であつた。漁獲物の平均体重は約100ポンド（12メ）で3隻の漁獲総計は約10トンであつた。

三隻の漁獲率には若干の差があつた。コモンウエルス及オーショニツクは約100本で約キハダ2尾の平均、ブラザーズは約100本に僅か1本平均にすぎなかつた。

キハダの漁獲は、二つの魚群から成立つていた。即ち、小さい型の群は平均60ポンドで、これは表層群と思われる。又平均体重125ポンドの群の方は、中層に分布しているものの様である。

延縄漁業の他に4日間クリスマス島周辺曵縄も行つた。これでは平均体重60ポンドのキハダ30本を漁獲した。

アメリカ鮪漁船の鮪釣実況

審議

この初めての試験中に鋼線延縄漁具に欠陥が発見された。漁具の操作には不足はなかつたが、鈎にかかつたマグロを充分に保つてはいなかつた。これは、こわれた枝縄や、逃れた魚からついたと思われるつりもとののろ（粘液質）や、漁獲の量とは不釣合な幹縄のすれ等から明らかである。

更に、環の破壊試験の結果ではつりにかかつた魚の中の⅓が水揚された様に思われる。鋼線は弾性が充分でなく、又、かかりたての魚が必死にもがいているのをくじくのに効果あらしめるためには水中でひつぱつたときの摩擦が充分でない。その結果魚は屢々逃げたし又漁具はこわれた。

（1954. 10. 14 記事）

米国調査船チヤールス・Hギルバード号夏朝航海より帰港

—マーケツト・ニユース・サービス—

（サンペドロ版　1954. 9. 1 記事）

アメリカ合衆国魚獣局調査船ギルバード号はハワイ近海におけるかつお（土語アク）の漁業調査航海を終えて8月26日ホノルルに帰港した。この航海は太平洋水産研究所によつて計画されハワイ周辺漁場特に現在、当業船の操業する海域における魚類の量の季節的変動の調査を目的として行われた。

今次航海の科学的調査部門を受持つた生物学者の報告によれば、魚群はマウイ島とオアフ島の南方沖合と、ニーハウ島の約100マイル西方に多量に現われるとのことである。又大型魚の大群がモロカイ島・カラウパパの北方約20マイルに発見された。島の北方ではかつおは少なく、僅かに数ケの群が見られたにすぎなかつた。

白色プラステイツクのチユーブで作つた標識をかつおの背にとりつけて放流する作業は継続して行われ、156尾が標識放流された。放流魚の一尾は、放流後数時間の間ギルバード号の舷側を他の魚と一緒に約8ノツトの速力で泳ぎ続けて居たのが見られ、附けた標識のために魚の運動が不自由になる様子はなかつた。全ての漁業者は、漁撈の際、標識をつけた魚に注意し、又放流魚を再捕した場合は、これを研究所へ送り返すようにしなければならない。魚は放流前に体長の測定を行つておき、回游や成長度についての調査資料を作つている。

あめりか・にっぽん鮪物語

河野通明
（日本輸出冷凍水産物検査協会常務理事）

目　次

序
1. 米国マグロ産業はどうして発展したか
2. 第二次世界戦争を迎えて
3. 水産資源か畜産資源か
4. 朝鮮事変を契機として
5. 冷凍マグロ関税問題の波紋
6. 日米両業界、調整期に向う？
7. マグロ漁業より見た米国と日本（以上前号）
8. 米国マグロ産業界の現状と今後の課題
9. 米国マグロ産業の政治動向
10. 拡大発展への途

8. 米国マグロ産業界の現状と今後の課題

現在、米国には390万函を上廻るマグロ缶詰のストックが発生し、その売行きは甚だ不振であると報ぜられているが、それを反映してか、日本からの輸出も茲2、3ケ月の間は殆んど沈黙状態を続けて来た。

この問題に関して日本の政府側機関の見解として業界紙が伝えたところによれば、日本の缶詰輸出不振は原爆マグロの影響ではなくて、(1)米国の一般的景気停滞(2)今年の夏が涼し過ぎたという気候の変化(3)米国のマグロが大漁であつたという三つの原因を指摘している。

では一体米国のマグロ産業界はどのような考え方をしているのか、これを米業界誌パシイフイツク・フイシヤマン10月号所載の「マグロに関する共通の問題」より要約して述べると、大量の在庫が発生した原因として、(1)漁獲増大による缶詰生産の増加と(2)缶詰小売価格に対する消費者側のレヂスタンスの二つを挙げて売行き伸悩みの事実を認め、これが対抗措置としては缶詰価格の引下げと同時に原料マグロ価格の切下げを強調している。そして特に日本からの冷凍マグロと塩水漬マグロ缶詰の輸入増大を取上げ、これこそ米国のマグロ産業に悪影響を及ぼす最大の癌であると見なしているようであるようであるが、これに対処する今後の基本方針を打ち出すため、米国マグロ産業界では従来稍もすれば分裂し勝ちであつた思想の統一をはかり総力を結集することになる模様である。

以上に述べた二つの見方は何れも在庫の増加と売行き不振の原因を主としてマグロ産業そのものの内部事情及び輸入の増大という点から追求しているのであるが、今度は食品市場全体の立場からマグロ缶詰を観察することにしよう。

米国においては従来から獣肉、鶏卵、及び酪醲製品の出廻りが豊富となり価格が下ると極まつて魚類の需要を圧迫して売行き不振の因をなしたものであるが、最近漸くこの傾向が顕著になつたように見受けられる。この様な畜産食品対水産食品といつた関係から、次に水産食品内部の組合せを覗いて見ると、(1)缶詰類、(2)塩干蔵燻製品(3)生鮮冷凍製品、(4)調理加工の上、気密防水の包装を施した冷凍製品の四つに分類することが出来る。そしてこれらの間にもそれぞれの競争関係が存在しているのは勿論であるが、特に昨年度より新にデヴューし急激に伸びてきたものに「フイツシユ・ステイツク」と呼ばれるものがある。この新製品というのは長さが3寸位厚さが5分位の四角い棒状になつた魚の切り身に、パン粉を付けて油で揚げ、その上に包装を施して冷凍した食べ物である。これを買つて帰つて家で暖めその場で食べるといつた極めて便利な製品であるから、今後魚類缶詰の強敵となる要素を多分に含んでいると言わねばならない。

更に缶詰の分野を一瞥すると、嘗てはサケ、イワシ、マグロの三者が鼎立の状態であつたが、サケとイワシの不漁による生産の減退からマグロがトツプに立つて独走を続けてきたものである。然しながら本年度はサケ漁の回復が著しく缶詰の量産も有望視せられ、又一方、加州の北部海上ではイワシの大群を捕捉したと伝えられているので、これら二者が昔日の隆盛を取り戻すことにもなればマグロも安閑としているわけにはいかなくなる。

このように、食品市場という「場」に立つて、マグロ缶詰をとりまく周囲の事情を観察して見ると、食品市場を構成しているいろいろな要素が質的にも量的にも変化しつつあることが明らかである。

では茲で一寸「実験教室」といつたような考えで、マグロ缶詰を次に定義する物の面から分解してみることに

する。

マグロ……………蒸煮したマグロの肉
塩…………………少量の食塩
油…………………食用油（棉実油又は橄欖油）
水…………………飲　料　水
缶…………………錫引薄鉄板

とすれば、

油漬マグロ缶詰＝マグロ＋塩＋油＋缶
塩水漬マグロ缶詰＝マグロ＋塩＋水＋缶

となるが、両者の相違は油と水を置き換えたためコストが大いに違う点と一般に前者が小型缶で後者が大型缶として生産されることである。

従つてこれを消費面から眺めると。

油　漬＝内容を主とする一般家庭用で個人的消費
塩水漬＝値段を主とする学校給食や大衆食堂といつた団体的消費

というのが実情である。

そこでもう一歩実験教室的な考え方を進めて見ると、

『マグロ＋塩＋包装』×冷凍

即ち『調理加工の上、気密防水の包装を施した冷凍マグロ』が可能であり、冷凍技術が高度に発達している米国ではこの種の製品をつくり出すことは容易であろう。そして各家庭には電気冷蔵庫があり、スーパー・マーケットやチエイン・ストアーをはじめあらゆる食料品店には冷蔵庫が完備し、その上冷凍設備のある大型トラックが常時運搬に当り、その機動力を発揮している現在の米国においては、戦時中のように食料品を買溜めして長期間保存する必要がないので、『マグロ』の品質と風味が大して変らずに値段が安く出来のであれば、案外このような新製品が商品として成功するチャンスが濃厚である。

このようにマグロ缶詰をめぐる客観的条件が深刻且つ広範に変化してきたのであるが、これに対処するため一体マグロ缶詰はどのような『自己革命』を演ずるだろうか、そして絶えず前進を続けている他の食品群に対し如何にして自己の競争性を回復し、優位を確保することが出来るであろうか。

これが今後のマグロ缶詰に与えられた課題であると同時に、米国のマグロ産業界にとつてはは頭痛の種であ。

ところで、今から50年前にマグロという魚に商品としての価値を発見して育成発展させた油漬缶詰の時代は過ぎて、塩水漬缶詰の時代になつてきたのではないだろうか。そして更にはマグロが缶詰という「鉄の衣」を脱ぎすてて、冷凍という「氷の衣」に身をやつす時代が来ないとも限るまい。

9. 米国マグロ産業の政治動向

前節において述べた如く、米国のマグロ産業は諸種の困難に取り巻かれている実情であるが、これに対処して経済的解決方法並びに政治的解決手段に訴えるという両面策戦を企図していることが明かである。

こうした動きの現れとして先ず第一に挙げられることは過ぐる7月19日米国マグロ研究財団が発表した覚書なるものである。この中でマグロ財団は米国務省の対日政策を批判して次ぎの如き強力な主張を行つたのである。

即ち『米国務省が熱意を以て支持促進せんとする日本の対米輸出貿易の急速且つ実質的な拡大計画というのは、他の一般的諸問題と同様、極めて物事を余りに単純化した嫌いがある。

勿論、日本を自由世界の一点とし、又西欧諸国の同盟国として保持すべきであるということならば、日本が拡大した世界貿易を通じて経済自立を達成することを許容するばかりでなくこれを援助することが大切であり又極めて望ましいには違いない。然しながら、従来の出来事や現在起りつつある事柄を調べて見ると、このような貿易の拡大を野放しにして置くならば必ずや日本は一種の製品に対して過大に依存するようになり、引いては、米国の1. 2の基本産業に取り返しのつかぬ害悪を及ぼすという片手落の結果を招く惧れがある。

試みに、戦争直前即ち1935年より1940年の間における米国の対日輸入状況を眺めて見ると、対日輸入金額は年間平均にして 163.000.000 弗となり、輸入総額の2.625.379.000弗に対して65%であつた。

昨年1953年度は如何と言えば、対日輸入は 261.603.000 弗となり輸入総額の 10.874.627.000 弗に対して僅かに24%であつた。

次に1953年度と戦前1935年から1940年までの間のマグロ輸入状況を調べて見ると、戦前は対日輸入金額の僅か1% であつたものが 1953 年には特にその10倍の11.1%に上昇したのである。

このような事実に鑑み、米国のマグロ産業としては対日輸入品の受入増大計画の実施に当り、既にその責任を果して来たのであつてこれ以上の重荷を引受けよとの呼び掛けには応ずる必要を認めない。米国のマグロ産業こそ対日輸入品として許可すべきマグロの数量に関し、量的制限措置を確立し以て存立発展すべきものである。

日米両国のマグロ産業は、分かち与えられた市場を互に基盤として繁栄拡大すべきものである。』

更に9月中旬、米国務省が国会議事堂に於て開いた

ＧＡＴＴ条項の審議に関する公聴会には、米マグロ研究財団の理事であり事務局長をつとめているモーリス氏が加州魚類缶詰組合、米国マグロ船組合及び漁業者協同組合の三団体並びにその他の関連産業を代表して出席した模様であるが、加州の業界紙ニュースパイロット９月15日付の報道するところによれば、モーリス氏は次の如き見解を発表した。即ち『34ケ国の加盟国によつて構成されＧＡＴＴという名で知られているこの国際機構は、マグロ産業の将来にとつて決定的な脅威となる輸入条項を基本として実施すべき旨の採決を行つて来た。これをせんじつめれば、ＧＡＴＴは米国会がいまだかつて批准した試しがない所の輸出入に関する一連の規則を採択するに至つたこの点、ＧＡＴＴが立法機関として存在することは特に憲法違反である。即ち憲法第第一条第八項では、海外との通商を規制することは米国会の機能と権限であると規定している。

然しながら、米国のマグロ産業はＧＡＴＴを破壊する意志はなく寧ろ、諮問勧告者の役割を果す貴重な機構であると考えているが現在のやり方では反つてマグロ産業を破壊する。

例えば、割当などということはＧＡＴＴを通しては不可能である。ともあれ、輸出品と輸入品に適切妥当な割当を課することが米国にとつても又、従来より米国の市場を享受してきた諸外国にとつても、唯一の解決となる。』

このように米国のマグロ産業はＧＡＴＴ問題について重大な関心を有すると共に大きな不満を抱いているわけであるが、事実日本がＧＡＴＴ加入に成功してその加盟国となつてしまえば、対日輸入割当も関税引上げも殆んど望み薄となるのである。

それから、去る10月９日、焼津港においては、久保山氏の市民葬が全国民哀悼のうちにしめやかに取り行われたのであるが、奇しくも加州のサンペドロ港においては10月９．10の両日を期して、商業会議所主催の下に『漁民祭』がはなばなしく繰り展げられ満艦飾の漁船が港内に集つてけんを競い、伝えられるところによれば、同日は特に加州選出のニクソン副大統領が主賓として祝辞を述べる予定であつたと言われる。

上に指摘した事件は、ほんの少数の事例に過ぎないけれども、今後米国マグロ産業の政治行動の面で、どのような形となり、どの方向へ如何に進展するか分らないが、来る11月２日に迫つた大統領中間選挙を一つの山として政治活動を盛り上げ何等かの具体策を打出さんとするものと考えられる。そしてこのことは来年１月の米国会を第一の目標とし、２月のＧＡＴＴ交渉開始を第二の狙いとする一連の予備行動として軽視することは出来ない。

経済は政治に連りつつ互に反応するとするならば、このような動きも亦当然と言わねばならない。

10. 擴大発展への途

10億弗にのぼる巨大な資本を投下し、１億６千万をこゆる厖大な消費人口を擁して急速に国内重要産業の一に躍進してきた米国マググロ産業と、それに比べ水産資源を唯一の頼りに、伝来の熟練と技術を活用しながらようやく年額３千５百万弗の外貨収入をもたらすようになつた日本のマグロ産業とは、共に現在の地位を確保しつつ更に将来への飛躍を目ざして不断の努力を続けているのである。

然しながら両陣営は何れも全く孤立して単独行動を取ることは出来ない状態に置かれており、各々、内部的には複雑な利害対立の要素を包含しながらお互に、或る面では衝突しつつ他の面では妥協するという具合に背反と結合の連続を繰り返してきたのである。

そこで両陣営の内幕を覗き、これを構成する業者グループの立場と主張について調べてみると、大体次のように要約することが出来る。

日　本　側

(1)　マグロ漁業者＝最大の漁獲をあげ、最高の価額で処分するのが念願である。従つて、冷凍でも缶詰でもどちらでもよいから売れる方に売る。販売面が拡大されることを歓迎する。

(2)　冷凍マグロ輸出関係業者＝米国の需要があれば価格を見て供給出来る限り全部輸出する。これが国策に合致する。買つて来ないものは絶対に売れないのだから、米国の需要を優先にすべきである。

(3)　缶詰関係業者＝加工貿易最優先の建前から冷凍すマグロの輸出を抑制して缶詰原料の確保を図り輸出量の増大をすべきである。

米　国　側

(1)　マグロ漁業者＝漁獲物を処理する上に、多大の不利と不安をもたらす日本からの缶詰と冷凍マグロの輸入については数量制限と輸入時期の規則を行うことが必要である。依つて業界が自主的に行うか又は政府間の協定というようなもので早急に制限措置を構ずべきであり、そうでない限り関税賦課の立法手段に訴えて自己防衛を遂行する。

(2)　缶詰製造業者＝原料マグロの確保が第一の問題である。そして米国のマグロ漁業者を主とするのは勿論であるが、漁況の変化は予測出来ないので、世界中から

買いたいが特に日本の冷凍マグロは歓迎する。更に日本の缶詰については、販売方法が悪く米側に悪影響を及ぼす。特に日本の塩水漬マグロ缶詰は米側の缶詰市場を破壊するからこれを排除したい。

) 食料品輸入業者＝油漬マグロ缶詰は高率関税のために日本から輸入が出来なくなつた。その間油漬に代り、塩水漬の販路を開拓して今日に至つた。従つてこの努力を無にすることは断じて出来ない。

上述のように両陣営には各々三つ構成グループがあつわけであるが、それぞれのグループは内部的な関連性有し相互反応を行いつつ外部的には相手陣営の中の、害を共通にするグループと連絡提携をするといつた具に複雑な結び付きと奇妙な反撥状態を続けてきたのでる。

そして従来とも、このような錯綜した両陣営内部の諸係を整理統合して単純化した上、相互に共通な一つの制を創り出して取引の合理化と利潤の確保を図らんとるいろいろな動きがあつた。けれども両陣営間の折衝常に各々の内部がしつかりと固まつていないところかどんなによい試みでも、内部から崩れ去る場合が多かた。

このような動きのうちで、代表的な米国側の事例としは次の三つをあげることが出来る。

ニクデール構想＝既に述べた如く日米合弁会社を設立して、日本の冷凍マグロと缶詰を一手に輸入し、日米の利益を勘案しながらオパレーションを行う。

ローカー使節団の提案日米双方の缶詰会社が日米合弁会社を設立して日本の缶詰の一定数量を輸入して米国の缶詰と共に同じ販売網を利用して売り出す。但し、冷冷凍マグロは自由とし従来通りとする。

チャップマン博士試案＝日本の冷凍マグロと缶詰の輸入は、歴史的な輸入比率に準じ、且つ米国の消費量は一定割合に基いて、量的制限を行う。

ところで日本側は 1951 年以来、貿易管理令に基いて出マグロの量的制限と輸出価格の規制を実施してきた世間にいう、輸出枠をめぐる冷凍と缶詰の紛争というはこの頃から出発したものである。

しかしながら、本年6月に至つて、『輸出水産業の振に関する法律』が制定せられ、いよいよ日本のマグロ業もそれに依つて体系化され調整せられるものと期待れる。

簡単に説明すると、この法律に基く(1)輸出水産業組合冷凍と缶詰の二本建）、それに連る(2)共販会社（製品販機関）、その対立物としての(3)輸出組合となるわけある。

その上に今回、上の法律に基いて『輸出水産業振興審議会』といういわば統合参謀本部的な機関が生れることになつたので、水産物全体としては勿論だが特に今後『マグロ』の身の振り方については、真に頼母しい後見人が出来るというわけである。

扨て前置きはこの位にして愈々本論に移る。一体今後、日米両国のマグロ産業は如何にしたら相互に拡大発展することが出来るか、又その進行方向はどうであるか、更には拡大の規模及び発展して行く形態はどのようなものかといつた問題について考えてみることにする。

先ず日米双方ともそれぞれ赤裸々な願望というか或いは素朴な野心というか、そういつたものの実現達成が許容せられるとするならば、恐らく次のような本音を告白するすることであろう。

日本側『陸上資源に恵まれず、莫大な量の食糧をはじめ、諸種の原料物資を海外に仰がなければならない。しかし大和民族の歴史的条件とか国土の地理的条件によつて水産業だけは古くから自主独立の産業として発達させてきた。現在、すべて公海上の水産資源は国際原則に基いて広く世界の万民に開放せられているので、これからも公海漁業の発展をはからなければならない。その中でも、マグロ漁業は国内の需要を充し、輸出余力を生ずる迄に発展し今後も猶、ますます拡大しようとしている。従つて、水産業特にマグロ漁業は『国際分業』体制の確立を俟つて日本に全部一任してもらいたい。』

米国側『マグロ缶詰の生産に先鞭をつけ、国内市場を開拓して今日の隆盛をつくり出すには、物心両方面において測り知れない努力と犠牲を払つてきた。このようにして礎き上げた国内市場に、何の努力も犠牲も払わずに日本品が乱入しては誠に困る。現在、国内の缶詰生産能力は益々充実し、一方マグロ漁業も次第に規模も拡大し新漁場も発見されてきた。そこで何よりも先ず、日本品を排除し、国内のマグロ漁業を急速に的展させて原料魚の自給自足を図り、その上で国内市場を独占したい。』

雑と以上のようなことになるのであろうが、現実問題としては何れも出来ない相談である。そして今日米国のマグロ缶詰市場を構成している要素にしても厳密な意味で米国固有のものばかりではないし、又、缶詰の生産及び供給が可能であり、充分に成立つためには米国と日本及び中南米諸国との協力関係の存在が一つの重要な条件である。

それでは日米両国のマグロ産業にとつて何か当面の共通問題であるか、又何が今後の共同目標であるかということになる。それは端的にいうと、第一に市場の安定、第二に市場の拡大、この二つであろう。

で、市場が安定すれば合理的な利潤が確保せられるし、市場が拡大すれば、米国にとつては生産と販売の促進となり、日本にとつては輸出貿易の増進となつてくる。

それには、米国内の既存市場を確保してこれを維持するよう努力すると同時に、広く処女地を開拓して新市場を育成するため犠牲を惜しまぬ覚悟が必要である。このためにはまた、日米双方とも、各々の立場と役割をよく認識理解しなければならぬが、茲で最も大切なことは、日本として先ず第一に『市場拡大』実現への参加協力を行うこと、そして米国もこれを歓迎すると共に、日本の協力的役割を善意に評価するということであろう。

所詮、米国のマグロ産業が国内市場から日本のマグロ産業を締出して、市場の独占支配をはかるといつた超孤立主義への途を進むとも思えないし、又日本のマグロ産業が米側の善意と現実を無視して製品をダンプする、というような無謀な輸出が永続する筈もない。

このように考えてくると日米両国のマグロ産業はどうしても『市場の安定と拡大』という共同の目標を達成するよう他に途はないが、それには実行性ある『計画』をうち建て、これを実現するために必要な体制の確立と方法手段の発見が急務となつてくる。その一例としては、国際小麦協定に見られるように、日米間に或る一定の期間、マグロの価格や数量について協定を締結することも考えられるし、更には将来に向つてマグロの生産を増大し消費を促進する目的を以て世界の生産国家群と消費国家群で世界マグロ機構を創設するといつたことも考えられる。

何れにしても、日本は国家的見地からみて今後ますますマグロ産業を発展させなければならないのであるが、それには米国の市場拡大に参加協力をおこたらないと同時に広く世界全土に新市場を開拓するよう全力を尽すことが大切である。

* * *

圖書誌の分譲其他について

◎ 本会発行の図書誌を分譲しますから御申込下さい。漁場天気図は本会にて研究の上編集制定したものでありますから同方面の漁場へ出漁する漁船は是非御利用下さい。

漁場天気図	（東部印度洋、西部太平洋 25°N—25°S 80°E—150°E） 昭和29年8月版	定価 1部 250円	（B3判50枚綴）	郵送料 48円
会誌〔鮪漁業〕	第6～16号	定価 各100円		郵送料 16円
鮪類水揚地調査報告（其の一）	自昭和27年5月 至昭和28年4月	定価 1部 300円	（B5判 150頁）	郵送料 24円
鮪漁船操業図	（航走距離早見表、鮪類年令対体長体重表刷込）	定価 1枚 50円		郵送料 8円
鮪漁場図	（32海区劃に表示したもの）	定価 10枚 50円		郵送料 8円

◎ 会員各位の鮪漁業に関する調査や研究或は体験、漁具漁法の改良、遭難防止等についての投稿其の他写真を御願いします。

◎ 本会に入会を希望される方は住所、氏名、職業、会誌の送り先を記入の上年間会費1000円（他に会誌送料200円）を添えて研究会宛御申込下さい。

◎ 本誌に広告掲載御希望の方は、本会伊藤主事迄御申込下さい。

鮪漁業

1955年1月号

定價 100円 （送料16円）

昭和30年1月印刷
昭和30年1月発行
監集 神奈川県水産試験場調査部
編集兼発行人 菅野進
神奈川県三崎町 神奈川県水産試験場内
発行所 鮪漁業研究会

謹賀新年

祝三浦市制

船舶食糧品
株式会社
(は) 星野商店
神奈川県三崎港　電話235

ボンデン竹、桶類
竹仙商店
三崎港　日の出

佐藤薬局
神奈川県三浦市三崎町　電話177

有限会社
山久洋紙店
横須賀市衣笠栄町1の65
電話（横須賀）776

三崎無線通信士協會
会長　塩瀬厚
神奈川県三浦市三崎町日の出163
電話366

土地建物の御相談は
三崎土地建物有限會社
社長　塩瀬厚
神奈川県三崎市三崎町日の出136
電話366

鮪漁業研究會

会長　菅野進
副会長　四宮秀雄
主事　伊藤順男

神奈川県三浦市三崎町向崎　電話338・118

服喪中につき年賀欠禮致します
順光丸
水野平吉
神奈川県三浦市三崎町花暮245　電話77

謹賀新年

祝三浦市制

日新興業株式會社

本　社　大阪市北区中之島3の3（朝日ビル）
電話（23）1334・1836・2351・3631
東京支店　東京都中央区銀座西6の3（朝日ビル）
電話（57）4385・6810

綿延繩、綿撚糸、綿織物

東邦商事株式會社

本　社　東京都中央区八重洲3の7（建物ビル）
電話千代田（27）6765・6791
工　場　大阪・浜松

三鷹漁網株式會社

取締役社長　角南貞雄

本社工場　東京都三鷹市下連雀400
東京営業所　東京都中央区銀座1の6（皆川ビル）

神奈川縣漁業無線協會

会長　長崎勝平
主事　川崎淳一郎

神奈川県三浦市三崎町向崎　電話118

第7七洋丸

共同物産株式會社

本　社　東京都中央区銀座東6の7（木挽館ビル3号館）
三崎営業所　神奈川県三浦市三崎町花暮17　電話530

株式会社

山口縣漁業公社

社長　江熊哲翁
副社長　天野郡治

下関市大字大和町30番地　電話下関（2）6058

謹賀新年

祝三浦市制

村松印刷株式會社
横須賀市大滝町二丁目一五番地
本社工場　電 横須賀 254・957
東京工場　電 本所 (63) 3743
三春工場　電 横須賀 1601
横浜営業所　電 長者町 (3) 4292

昭和無線株式會社
神奈川県三浦市三崎町花暮一五七
電話 563

出光興産株式會社
三崎出張所
所長 日野雅臣
神奈川県三浦市三崎町
電話 432

三崎漁業資材株式會社
神奈川県三浦市三崎町西野七
電話 449

鮪釣針及釣メッキの御用は
是非弊社へ御用命下さい
日本釣具製作所
神奈川県三浦市三崎町
電話 212

旅館・御料理
岬陽館
神奈川県三浦市三崎町
電話 11・170

割烹旅館
温泉亭
三浦三崎港
電話 19

御寿司
味の店 **大松**
三浦三崎 電話 247

神奈川縣漁船保険組合
組合長 矢板開一
神奈川県庁水産課内
電話本局 (2) 2331～9番

諸磯漁業協同組合
組合長 理事 出口伊太郎
神奈川県三浦市三崎町浜諸磯　電話 917

祝三浦市制　謹賀新年

株式会社
三保造船所
本社工場　清水市三保
東京事務所　東京都中央区八重洲三ノ七（建設ビル）
電話　千代田（27）五五二二／六七七五

三崎船舶工業株式會社
取締役社長　平井顕
神奈川県三浦市三崎町
電話　三四三番

この度三崎地区に代理店を新設致しました。漁業用無線機一切にかんしましては何卒弊社に御照会御利用賜りますよう御ねがい申上げます。

JRC
日本無線代理店
三崎日本無線
三浦市三崎町日の出一一
電話　六三五の乙

太平洋鮪鰹漁船保険組合
組合長　大浜喜一郎
副組合長　寺本正市
常務理事　林信雄
同　古谷喜一
東京都港区芝海岸通一ノ七
電話　芝（43）四六〇五

綿／クレモナ　鮪延縄、綿撚糸、製造販売

倉敷レイヨン株式会社　クレモナ延縄指定工場

山田撚糸株式會社

本社工場　八尾市大字亀井　電話（東住吉）559・2113
東京営業所　東京都品川区西戸越二ノ六七二　電話（荏原）6553

謹賀新年

祝三浦市制

三崎港遠洋漁船船員消費生活協同組合

組合長　二ノ宮友三郎

専務理事　林藤一郎

神奈川県三浦市三崎町花暮18　電話868の甲

室戸遠洋鰹鮪漁業船主組合

高知県安芸郡室戸町

薩州丸

伊藤漁業株式會社

社長　伊藤由五郎

神奈川県三浦市三崎町仲崎八五

電話八二五・四四五番

福生水産株式會社

取締役社長　福島福一

神奈川県三浦市三崎町花暮一二一

電話二五二・八三七番

高知丸

上原虎松

横須賀市洲崎一六四

電話浦賀二一一六番

崎吉丸

崎島理平

神奈川県三浦市三崎町

電話六五三番

祝 謹 三 賀 浦 新 市 年 制

光榮丸

金澤德尾

神奈川県三浦市三崎町花暮一三二
電話三二一・八三六番

大黒丸

山村利久

神奈川県三浦市三崎町花暮一六三
電話七一番

小島大黒丸

小島政夫

神奈川県三浦市三崎町仲崎一六一
電話二〇三番

乾水産株式會社

本社 神戸市生田区海岸通三
三崎営業所 神奈川県三浦市三崎町宮城

東邦水産株式會社

本　　社　東京都港区芝田村町1の2（日産館）電話(59)3824
三崎出張所　神奈川県 三浦市 三崎町 仲崎142　電話　372

精良丸

かくじう水産株式會社

社長　**畠山泰藏**

本　社　気仙沼市魚町　電話 117
出張所　神奈川県三浦市三崎町宮城　電話 4

祝 **謹** 三 **賀** 浦 **新** 市 **年** 制

特約店ホセン・フラスキン
船舶仕込薬品
ハツネ薬局
神奈川県三浦市三崎町入船五五番地
電話四六二番

鮪延縄・撚糸・製造販売
・浦賀製氷冷凍工場営業取扱
三馬ゴム株式会社特約店
神奈川縣漁業協同組合
連合會三崎出張所
神奈川県三浦市三崎町
電話四三〇

三浦市長職務執行者
草場林太郎

三崎ビタミン
三浦市三崎町西之浜四六
電話四六〇番

（本社 大森工場）**湘南化學工業株式會社**
東京都大田区森ケ崎町九七番地
電話大森(76)八一二六番
八一二七番
分工場 三崎ビタミン・焼津ビタミン
気仙沼工場・青森工場

強くて、腐らぬ、クレモナ延縄

倉敷レイヨン
指定延縄工場 **玄番工業株式會社**

大阪府八尾市字竹渕501番地
電話東住吉1407・773・49

謹賀新年

祝三浦市制

焼津漁業協同組合

組合長　近藤久一郎

静岡県焼津市城之腰七二
電話（代表）1033

焼津遠洋漁業協同組合

静岡県焼津市中二三〇

昭和漁業株式會社

社長　服部亀吉

本社　静岡県焼津市城の腰一一五の一

用宗遠洋漁業株式會社

静岡市用宗一三一八

清壽漁業株式會社

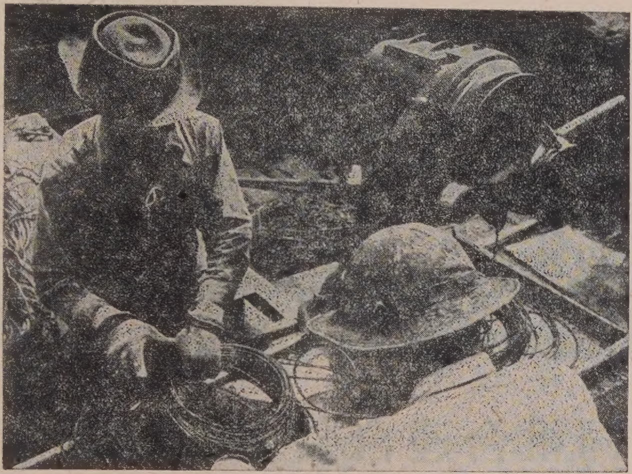
静岡県清水市港町三ノ三

御前崎遠洋漁業協同組合

静岡県榛原郡御前崎村四四〇四
電話　31・71

倉　敷
ビニロン　クレモナ

鮪延縄　ロープ　漁網



クレモナ縄に依り操業中の相模丸
同船ではすでに延300回以上使用し今だに使用しております。

値も安い
使いやすい
くさらない

倉敷レイヨン株式会社

本　　社　大阪市北区梅田二番地
東京事務所　東京都中央区日本橋室町2ノ4

NISSAN NYCO
高性能重油完全燃焼剤

ニッサン　ナイコ
（#11バーナ用・#31デイゼル用）

特徴
1. スラッヂの分散　2. 燃焼カーボンの軟質化
3. 燃焼効率の向上　4. 腐蝕の防止

日本油脂株式会社

本　社　東京都千代田區丸の内2の3（東京ビル）
電話 和田倉（代表）2301・2401
支　店　大　阪、札　幌、福　岡
營業所　名　古　屋

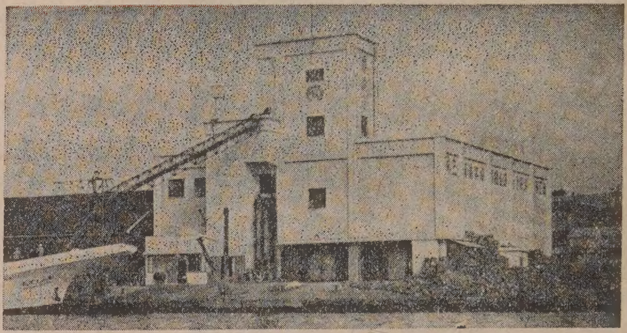
漁船の氷，餌料の仕込は

三崎漁連へ砕氷設備毎時50屯2基完備

（向ヶ崎・花暮岸壁）

凍結能力 日産一七屯

冷蔵收容量 六〇〇屯



製氷能力 日産五〇瓲

貯氷能力 五五〇瓲

三崎漁業協同組合連合会（製氷冷凍工場）

会長　寺本正市

（神奈川県三浦郡三崎港 TEL三崎609・655番）

鋼木船造修一般

五百屯船台一基

四百屯船台二基

三崎船舶工業株式会社

神奈川縣三浦郡三崎港（電話 三崎 343 番）

謹賀新年

祝三浦市制

輸出ヴイタミン油・罐詰・冷凍魚・遠洋漁業・各種魚類肝臓買付

湘南水産工業株式会社

神奈川縣三浦市三崎町二町谷三八〇六の四　電話三崎・三七〇番・三六二番

石油・酒類はゼネラル物產特約店

株式会社 **香山角太郎商店**

神奈川県三浦市三崎町西野六七　電話三崎
一〇番（酒　部）
八二六番（石油部）
二五〇番（貯油所）

諸官廳船……遠洋漁船……御用

創業五十年
最良の品質
最善のサービス
を誇る　株式会社 **安保商店**

▷三崎御入港の節は何卒御引立の程御願い致します◁　電話三崎一一六番

魚問屋水產加工漁業

株式会社 **長谷川廣吉商店**

神奈川県三崎港　電話三崎三七番

鮪延縄漁具一式
船具・漁具・工具・塗料
製造販売

株式会社 **山星商店**

本社　東京都中央區月島通り四の五　電話深川（64）一九五九
営業所　神奈川縣三浦市三崎町海南五四　電話三崎五四

三崎漁業協同組合連合会（製氷冷凍工場）

會長　寺本正市

神奈川県三浦市三崎港　TEL 三崎 609.655 番

祝三浦市制

謹賀新年

日魯漁業株式會社

本　社　東京都千代田区丸ノ内2ノ2丸ビル4階
電話 和田倉 (20) 1851 (代表)

大洋漁業株式會社

本　社　東京都千代田區丸ノ内1ノ4新丸ビル6階
電話 千代田 (27) 代表 1041, 1241

事代漁業株式會社

取締役社長　寺本正市
本　社　神奈川県三浦市三崎町花暮一四七番地
電話三崎 378, 56

神奈川縣鰹鮪漁業協同組合販賣所

組合長　寺本正市
神奈川県三浦市三崎港
(電話三崎八六〇～八六四番)

三崎魚類株式会社
三崎町魚商協同組合

神奈川県三浦市三崎町西野九二
電話 三崎 市外専用 570～4 市内専用 670～4
事務専用 575～6 製函部用 675

住吉漁業株式会社

社長　四宮秀雄
神奈川縣三浦市三崎町入舟六二
電話三崎603・835番